33
282

オスカア.ワイルド著

鷗沼直譯

始

338
282

オスカアワイルド著

鶴沼直譯

オスカア・ワイルド作

沼田直譯

ミヤ夫人の扇

帝國圖書館藏
白井シタヨ

東京　不老閣書房

大正
S. 4. 1
内交

序

ワイルドの「レーデヰー、ウヰンダーミヤス、ファン」は、彼れが數ある戯曲のうち第一に成功した作と稱せられるものである。「サロメ」は新古典劇として舞臺の上に、成功した作であるが「レーデヰー、ウヰンダーミヤス、ファン」は彼れがシェリダン以後の人といはれるアイルランド氣分の一面を發揮して作として、少なくとも讀んで見て「サロメ」の次

に重要な劇である。

ワイルドの一代は悲慘にして同時に美しいものであつた。人生をして藝術の摸倣たらしめんとする彼れの教義は、今日なほ生きて疑問として殘つてゐる。

大正三年三月　　島村抱月識

序

近頃は歐羅巴の近代劇の飜譯が續々舞臺に上ぼされることになつた、尤もそれが皆が皆十分に觀客に解るといふのでは無からうが、さういふ風にして行くうちには公衆の劇に對する趣味が漸次向上して行くとゝもに、公衆に歐羅巴人の意味ある生活が解るやうになり、次第に公衆の思想が養はれることにならうと思ふのであるから、近來のやうに歐洲劇が續々上場せられるのは實に喜ばしいことである。

しかし、さういふ劇の演ぜられる場合に見物席にゐて見ると、觀客の中には未だまるで歐羅巴人の風俗習慣、心持、擧作の意味が解つて居ない人があるこ

とに氣が付かざるを得ない。命のやりとりといふやうな凄い場や、女が必死になつて戀愛を告白するといふやうな涙の滾れるやうな場で、笑聲が見物席で起ることも無いでは無い。勿論それには役者の藝の十分でないことも一原因を成して居るには違ひ無いが、それにしても、未だ公衆に歐羅巴劇を本當に解するだけの素養の無いことは明かである。

此に於て、私は、今何處でも演つて居るやうな歐羅巴の近代劇中の六ケ敷いもの、謂はゝ辛いもの、澁いものよりも、もう少し平易なもの、もう少し甘いものを演らして見たらば、役者の今日の技倆の程度及び觀客の理解力の程度から見て、誰にでも見せるものとしては、もう少し適當では無からうかと思つて居る、即ち、今の日本人の普通の人情で理解し得られ、普通の趣味に協うと

いふやうな歐羅巴の近代劇を上場して見度いと思つて居るのだ。

嘗て仲木貞一君からさういふ意味の劇團が出來るといふ話を聞いて私は喜ばしく思つたこともあつた。

で、さういふことを考へた時に、そんなら大凡何ういふ程度の脚本が宜からうかと考へて見たのであるが、其の時心に浮んだ幾個かの脚本の中にオスカア・ワイルドの『ウキンダーミヤー夫人の扇』がその一つとして入つてゐた。

此の劇は全く常識の劇である、通常の人に取つて不可解な處は何處も無い、唯だウキンダーミヤー夫人が夫を捨てゝダーリントン卿の處へ行くといふのが日本の婦人の一般の考には少し受け取られ兼ねるかも知れ無いが、それとても、見物が少し落ち着いて考へれば理解し得られ無いことでは無からうと思ふ。で、

外の部分はといふと、觀客の好奇心を引き、觀客の感情に訴へる組立が寔に良く出來てゐるのだ。

で、今此の脚本が鴉沼君の手で譯されて、世に出ることは、私に取つては甚だ喜ばしいことである、どうか斯ういふ種類の脚本がもう少し多く飜譯せられるやうになり度いものである。

千九百十四年三月

馬場孤蝶

はしがき

オスカア・ワイルドは一八五四年十月十六日ダブリンに生れた、父はウイリアム、ワイルドと云つて眼科と耳科とを兼れた專門醫師で、技術にも優れ、異性にも可成の興味を持つた至つて派手やかな人であつた。母はエリザーと云つて至つて怜悧な、ラテンやグリークにも通じた文才の豐かな婦人であつて、ワイルドを生んだ時は二十八歳で、父は三十九歳であつた、ワイルドは次男で長兄はロンドンの有數なる新聞記者であつたが、一八九九年ワイルドより一年早く死んだ、一人の妹イソロラがあつたが沃死した。

九歳の折ポートラ公立學校に入つたが遊戯は嫌で、殊に數學には非常に不得手であつた、一八七七年ダブリンのトユリニチーカレーヂに入り四年後オツクスフオードに入り約四年間學び、一八七七年に至りマツフイ教授と共に伊太利や希臘を旅行したが、此旅行こそ後年彼の藝術に偉大なる感化を與へたものだと云はれてゐる。翌年彼はシエルドニアン座に於て詩を朗讀した以外に何等藝術的活動はなかつた。オツクスフオードを去り僅かな收入を得てロンドンに住んだが、此の最初の三年間のロンドン生活こそ彼れが fantastic and aesthetic costumes を纏ひる epigram の taiker としてバーやレスーラントの定連に知られ遂にポンチ子に認められ度々カリケーチューされるに至つたのである。

彼の幻想的な、美術的衣裳は單に彼が苦心せる詩集を何れの出版者も引き受けかつた爲め殊更に人

目を索かせ評判させるが爲めに過ぎなかつたといふ批評家もあるが、それは單に彼に加へた一片の誣言に過ぎない、一八八一年に始めて出版した詩集が忽ちにして五版を重ねるに至つたのを見ても判ることである。

翌年彼は aesthetic movement の爲めに米國に渡り盛んに講演したが固より俗衆に充たされた米國の事とて何等の反響もなく、Vile Paper Bad. Placard に盛んにカリケーチューさるゝに過ぎなかつた、Vera の出演を見に再び渡米して歸つてから早速巴里に赴き文壇の知名士と交り The Duchess of Padua. the sphinx を書いた、

ロンドンに歸へつてからはヘーマーケットに間借してゐて盛んに地方へ出て行つては講演してゐたが一八八四年三十一歳の時マリー、リオツド嬢と結婚した、嬢は頗るの美人で又莫大な持參金を持つて來た爲めに彼の生活も樂になつてシエルセアに始めて樂しい家庭生活を營む事が出來た、其處に約十二間に住んで、其間有力な新聞に書いたり、又は「婦人世界」を二年間發行した、新婚翌年に書いた the truth of masks は彼の有名なる intenitons の中に收められ、沙翁と舞臺衣裳に關して書いた論文であるが、藝術家的性情が如何に衣裳の美に依つて眩惑され、又衣裳の美の觀客に與へる快樂が如何に甚大であるかを極論してゐる、是れ云ふまでもなく彼自ら纏つた幻想的な、美術的な衣裳と、一般生活上に、又舞臺上に於ける衣裳とにアイデンテフケーションを求めたものである。つて、演劇研究者の是非一讀せればならぬものである。

其後彼の藝術的生活が益〻爛熟の期に達し有名なる傑作集「拓榴の家」(余が目下飜譯中)「ドリアングレーの肖像」「サロメ」の作品を公にし、一八九二年に至り本書を出版し同年一月十日聖セームス座に於てジョーザ、アレキサンダー氏舞臺監督の下に公演された、公演の最初より非常なる喝采を博し遂に彼は熱せる觀客等によつて幕の前に引き出され、喝采に答ふ爲めに現はれたが、其際彼は半ば程になつた卷莨を左手にし乍ら平氣で挨拶したといふのは有名な逸話である。

其後此の脚本が歐洲の有名なる劇場に於て屢々公演され、最初彼を嫌つた米國に於てすら目下盛んに公演されるやうな奇觀を呈しゐる、他 the Duchess of Padua, A woman of no importance 等數種脚本があつて悉く公演されたが以上の社會劇中此脚本が尤もの優れたものであるのは云ふまでもない。

此等の脚本が斬次公演されるに至つて一彼は從來の如く單にポンチ子によつて巧みにカリケーチューされるばかりでなく遂に藝術的、一般的成功を贏ち得るに至つたが、晩年に至つて彼は藝術家にあり得べからざる不幸に遭遇した、例のクイーンスベリー侯爵に關する忌はしき事件は、私が曾察官、教育家(日本には教育事業に從事するビジネスマンはあつても眞の教育家はないが)、道德家(日本には道德を祖述し註解し而して自らを養ひ、家族を養ひ居る人はあつても眞の道德家はないが)でない限り、忌はしき事柄を知るのは全く無意味な事である、私にとつては唯だ世界の文壇に燦として輝く彼の藝術を知る事のみが目的であつたのだ。

彼は陰慘なる獄中に於ける苦役中にすら尙筆をとる事をやめなかつた、彼の有名なる De Profundis は獄中の土産であつて、出獄後は the Ballad of Reading Goal を一八九七年頃のディーリークロニクル紙上に載せた、晩年イタリイ、スキツルランド、フランスに住んだが、一九〇〇年十一月三十日遂に巴里に於て死んだ。

尙私の此の最初の企に對し藝術座の經營に苦心せらるゝ島村先生と「戰爭と平和」の飜譯に專念せらるゝ馬場先生が身邊多忙なる折柄極めて丁寧なる序文を與へられ、又不老閣主及び尙文堂店員伊東三郎兩氏が本書の出版に關して種々奔走せられた同情、と勞力とは私のこよなき喜の一つとして本書の卷頭に永遠に紀念するものである。

一九一四年三月ーワイルドの死後十五年目

二十六歳の春　鵜沼生

人物

ウキンダーミャ卿
ダーリントン卿
アウガスタスロートン卿
ダムビイ
セシル　グラハム
ホッバー
バーカー（給仕人）

ウキンダーミャ夫人
バーウキック公爵夫人
アガサ　カーリスル嬢
ブリムダル夫人
スタットフキルド夫人
デデブルグ夫人
クーバー　クーバー夫人
イレーネ夫人
ロサリー（小間使）

時　現代
場所　倫敦

戯曲は、二十四時間内の出來事で、或る火曜日の午後五時に始り、翌日の午後一時半に終るのである。

第一幕

舞臺

カールトン家の廣場に建てられたウキンダーミヤ卿の住宅のモーニングルーム。扉C、及びR。木や新聞紙等を置かれたる机R。茶卓附のソファL。廣場に向つて開け放たれたる窓L。テーブルR。

（ウキンダーミヤ夫人はテーブル R にあつて、薇薔の花を青い鉢に揃いて居る）

（バーカー登場）

バーカー。奥様には、午後に御在宅で御座りませうか？

ウキンダーミヤ夫人。居るよ——誰方か訪ねて來たのかい？

バーカー。ダーリントン卿が入らせられました。

ウキンダーミヤ夫人。（暫らく躊躇し乍ら）御案内申せ—妾は、誰方がいらつしやつても家に居るのだから。

バーカー。はい、畏りました。

（バーカー退場）

ウキンダーミヤ夫人。夜分にならない内に、彼の方が來て下さつて、恰度都合が好かつた。ほんに嬉しい。

（バーカー扉Cより登場）

バーカー。ダーリントン卿。

（ダーリントン卿C扉より登場）

（バーカー退場）

ダーリントン卿。奥さん。如何で御座います。

ウキンダーミヤ夫人。貴方こそ？　ダーリントンさん。え、貴方と握手は出來ませんよ、薔薇で手がすつかり濡れてますから。まあ、美麗じゃなくつて？今朝セルビイから着いたばかりなの。

ダーリントン。全く、美麗ですね、（テーブルの上にある扇を見乍ら）是れは是れは不思議な扇だ。見ても宜いのでせうねえ？

ウキンダーミヤ夫人。宜しう御座いますとも、佳い扇でせう！　それがね、妾の名前が書いであつて、まだすべてのものがあるんですよ。妾は、たつた今見たばかり、それはね、妾の夫が誕生日祝の贈物として妾に呉れましたの。そう、今日は妾の誕生日なのを御存知？

ダーリントン。え?、眞實(ほんとう)ですか?

ウキンダーミヤ夫人。え、今日が妾の記念日なの、一生涯の中で一番大切な日なの。そうじやなくつて? それで今夜催しがありますの、まあ、御坐りなさい。(繼けて薔薇を揃へて居る)

ダーリントン。(坐り乍ら)奥さん。今日が貴女の誕生日と知つて居れば好かつたのですが。そうなら貴女が御通りになる御宅の前通りを美し花で飾りましたのに。貴女の爲めに。(間)

ウキンダーミヤ夫人。ダーリントンさん、貴方は昨晩外務省で隨分と妾をいじめましたのね、まだ貴方が、いじめやしないかと思ふと、妾怕いわ。

ダーリントン。私が? 奥さん。

(バーカーと、從僕とが、盆と、茶道具とを持つて扉Cより登場)

ウキンダーミヤ夫人。バーカー、其處へお置き。それで宜いよ。(ハンケチーフで濕手を拭き、茶壺Lに行つて坐る)。此方へいらつしやいませんか、ダーリントンさん。

(バーカー扉Cより退場)

ダーリントン。(椅子を取つて、L、Cへ行く)奥さん、私は實際辛いのですよ。私はどんな事をしたのか御話し下さい。(テーブルLに坐る)

ウキンダーミヤ夫人。さあ、貴方は夜つぴて念入れの御世辭を言つてましたよ。

ダーリントン。(笑ひ乍ら)はゝ、今時分の男は大抵貧乏してますから御世辭を拂ふのが、たつた一つの愉快な事で。それが私達の拂ふ事の出來るたつた一つ

です。

ウキンダーミヤ夫人。（頭を振り乍ら）いえ、妾は、至つて眞面目に話してゐるのです。御笑ひになつちやいけません。本當に眞面目なのですから、妾は御世辭は好きませんし。まだ、男の方が色んな心にもない事を女に話して女を大變嬉しがらせたと思つて居るのが、妾には一向解りませんわ。

ダーリントン。いや、然し私はそういふ意味だつたのです、（夫人のすゝめる茶をとる）

ウキンダーミヤ夫人。（淑かに）嫌。ダーリントンさん、貴方と爭論するのは嫌ですよ。貴方を何より好きなのは御判りでせう。然し、貴方が世間並の男でしたら、すつかり嫌つたかも知れないが。御安心なさい、貴方は、世間のどの男よりも優れて善いのですから、それから貴方は、時々惡を裝ふやうに思

いますよ。

ダーリントン。私達は、大抵いくらかの虛榮を有つてゐますからね、奥さん。

ウキンダーミヤ夫人。では、何故、貴方は變な事をするんです？（テーブルLに坐つたまゝ）

ダーリントン。（L、Cに坐つたまゝ）はゝ、現代の自惚家等が、社會に出る際には、善を裝ふが、然し、私の考へでは、惡を裝ふた方が、寧ろ佳く、謙遜な風を見せるやうに思はせます。もう一つ言い度いのは、貴女が、善を裝へば、世間では貴方を極めて眞面目にとり、惡を裝へば、眞面目にとらない事です。何れにしても、こんな事は樂天主義者の實に馬鹿げた事に過ぎないのです。

ウキンダーミヤ夫人。そこで、貴方は、世間から眞面目にとられ度くはないの

ですか？　ダーリントンさん。

ダーリントン。いゝや、とられ度くはないですとも。一體、世間で眞面目にとる人間て、どんな人なのです？　そんな人間は、上、僧正より、下、くだらない人間に至るまで、誰でも知つてゐる面白くもない人間に過ぎないのです。私は、貴方には眞面目にとられたいのです。世間の何の人よりももつと眞面目にです。

ウキンダーミヤ夫人。どうして―何故妾に？

ダーリントン。（些し躊躇して）何故つて、私達は、極仲の良い友達同志かも知れないし。極善い友達になりませう。貴方は、何時か友達を欲しがるでせうから。

ウキンダーミヤ夫人。何故、貴方は、そんな方を仰有しやいますの？

ダーリントン。まあ！――私達は、何時でも友達が欲しいのですから。

ウキンダーミヤ夫人。妾達は、もう立派に仲の良い友達になつたと思はれますよ、ダーリントンさん。末永くいけますよ、貴方が――しない中は。

ダーリントン。どうしなければですつて？

ウキンダーミヤ夫人。馬鹿げた事をたんと仰有しやつて、友情を汚がさないければです。妾が、ビューリタンなのは貴方も御存知だと思ひますがね？

え、妾は、いくらかビューリタンの氣質があるんですからね、それに、そのやうに育てられましたし、まだ、それを喜んでも居りますわ。妾が、ほんの子供であつた時分お母さんに亡くなられ、伯母さんに當るジュリヤ夫人と、永い間住んで居ましたが、此の伯母さんといふのが、妾には、非常に嚴格だ

つたのですが、然し、伯母さんは私に、「正なるもの」と「邪なるものと」との間に置かれた差別に對して、世間の人は、如何に不注意であるかを敎へて呉れました。伯母さんは、妥協を是認せず、妾は何物も是認しません。

ダーリントン。奥さん！

ウキンダーミヤ夫人。（ソファに倚り乍ら）貴方は、妾を時代後れの人間と見てますね——え、宜う御座んす！妾はね、此のやうな時代と、同じレヴェルにあるのが、何より辛いのですから。

ダーリントン。貴女は、現代を大變善くないと御考へですね？

ウキンダーミヤ夫人。さうです。現代の人々は、人生は單に空論であると考へてゐますが、人生は空論ではなくて、聖靈であります。其の理想が愛であ

り、其の淨化されたるものが犧牲であります。

ダーリントン。（笑ひ乍ら）あゝ、犧牲の精神より惡いものはありますまい！

ウキンダーミヤ夫人。（前に屈み乍ら）そんな事を仰有しやいますな。

ダーリントン。私は、さう申します。私はさう感じ——さう解釋いたします。

（バーカーCより登場）

バーカー。奥樣、今晩皆さんが廣場に絨氈をかけませうか、どうかと申して居りますが。

ウキンダーミヤ夫人。雨になりますまいかね？　ダーリントンさん。

ダーリントン。貴女の、誕生日の事ですから降らし度くはないものですがね。

ウキンダーミヤ夫人。バーカー、では早速そうするやうに、皆さんにお言いよ。

（バーカー扉Cより退場）

ダーリントン。（坐つたまゝ）此の場合如何御考へになりますかね――勿論、これは私の空想に過ぎないのですが――例へば、結婚して二年ばかりになる、ある若い夫婦の間にですね、若しもその夫がひよつと他の女と親しい間柄となり――さて、其の女といふのが、人格が疑はしいばかりでなく、兎や角の噂のある女で――其の女を繁々と訪ねたり、一所に食事をしたり、時には、拂までもして遣るといつた場合にですね――其の妻たるものが、立つ瀬があると御考へになりますか？

ウキンダーミヤ夫人。（顎を撫め乍ら）立つ瀬が？

ダーリントン。そうです、そうならねばなりますまいし――それが當然だと思

はれます。

ウキンダーミヤ夫人。夫たるものが卑劣でありますならば――妻もまた卑劣でなければならないでせうか？

ダーリントン。卑劣といふ言葉は怕るべき言葉です、奥さん。

ウキンダーミヤ夫人。怕しい事です、ダーリントンさん。

ダーリントン。世間に行はれる罪惡は大抵善人に爲されるといふ事を御存知ですね。實際彼等の犯す害惡は、彼等が必要に迫られ已むを得ずに爲す惡事なのです。人間を善人と、惡人とに分れるといふ事は不合理な事です。人間は面白いか、くだらないか何れかです。私は面白い側をとり、それから貴女は、奥さん、其の方の側です。

ウキンダーミヤ夫人。まあ、ダーリントンさん。（立ち上り夜の前のRに行き）そう、
　煽動てなさるな、妾は唯だ花を片附てるんですから。（テキーブルR、Cに行く）
ダーリントン。（立ち上り椅子を動かし乍ら）して又言はねばならないのは、貴女は現
　代生活を非度く非難してゐますが、奥さん。勿論多少非難すべき點のあるこ
　とは私も認めます。例へば、現代の大概の婦人は寧ろ雇兵であるなどです。
ウキンダーミヤ夫人。そんな人の事は御話なさらないで下さい。
ダーリントン。さあ、そこで、固より怕しい傭兵はさて措いて、婦人が世間で
　怨し難い失態をなした場合には如何御考へになりますか？
ウキンダーミヤ夫人。（テーヴルの側を立ち乍ら）怨し難いと思ひます。
ダーリントン。それから男子は？　婦人に對するが如く、男子に對しても同一

の法度がなければならないと御考へですか？
ウキンダーミヤ夫人。確かに！
ダーリントン。人生は其のやうなかた苦しい、杓子定規的な規則で固められて
　は餘り七面倒なものですね。
ウキンダーミヤ夫人。妾達は其等のかた苦しい、杓子定規的な規則で縛られる
　なら人生はもつと、もつと單純なものでせうよ。
ダーリントン。貴女は例外のあることは御認めになりませんか？
ウキンダーミヤ夫人。認めません！
ダーリントン。まあ。貴女は何んといふ魅力を持つたピエーリタンでせう、
　奥さん！

ウキンダーミャ夫人。形容詞は不必要ですよ。

ダーリントン。已むを得ませんからでした。私は誘惑を除いては何事にも反抗する事が出來るのです。

ウキンダーミャ夫人。貴方は弱々しい現代人の愛情を持つてゐますわね。

ダーリントン。(夫人を見乍ら)奥さん。唯だの愛情に過ぎないのですよ。

(バーカー登場)

バーカー。バーウキック公爵夫人と、アガサ　カーリスル嬢が御出で御座います。

(バーウキック公爵夫人、アガサ　カーリスル嬢扉Cより登場)

(バーカー退場)

バーウキック公爵夫人。(扉Cを下り、握手し乍ら)マーガレットさん、御目にかゝつて嬉しう御座います、貴女はアガサを覺ねてゐらしつて?。(L、Cに行つて)如何で御座います、ダーリントンさん。貴方は妾の娘と御近附にならいで下さい、貴方は隨分自墮落な方です。

ダーリントン。そんな事を仰有しやいますな。公爵夫人。實の處、全く自墮落な人間にはなれないのですから。何故つて云いますと、私のこれまで何れの方面にも間違といふものがなかつたと皆さんが申しますので。自墮落な人間だなんてほんの陰口に過ぎないのです。

バーウキック公爵夫人。あの方、怕かない?アガサや、これはダーリントン卿だよ。あの方の言ふことなんか信じなくとも宜いんだよ。(ダーリントン卿R、C

〈行く〉いえ、有難う、茶はいりません、（ソファに行って坐る）妾達は只今マークピィ夫人の御宅で茶を載いたばかりなので。やつぱり此のやうな悪い茶で。全く飲めませんでした。私は平氣でした。夫人の御婿さんが茶を出しましたのアガサはねえ、今夜、御宅の舞踏會を大變嬉しがつて待つてるのですよ、マーガレットさん。

ウキンダーミア夫人。（L、Cに坐る）まあ、舞踏會に御出でと、思ひなされては困りますよ。公爵夫人。ほんの、妾の誕生日の御祝のダンスに過ぎないのですから。小人數で、早ちまいの。

ダーリントン。（L、Cを立ち乍ら）至つて小人數な、至つて早じまいな、それから至つて選擇した、公爵夫人。

バーウキック公爵夫人。（ソファLに坐つて）無論選擇するのには違ひないわね、だが、マーガレットや、御宅では、選擇する譯が妾共も知つて居ますよ ロンドン中でアガサを連れることが出來、またバーウキックも安心して居られる、二三軒ある中のほんの一軒で。まあ、どんな團體が來るかも判らない。怕しい人間といふものは、何處へでも行くものと見える。妾達の會にも來——若し人が招待しないと、非道い亂暴をいたします。眞實に誰方が制裁を加へねばなりますまい。

ウキンダーミア夫人。妾は、公爵夫人。妾の宅には他に惡口を言はれるやうな人は居ないつまりですわ。

ダーリントン。（L、Cに） そんな事、仰有しやいましな、公爵夫人。默つては

居ますまいぞ！（坐る）

バーウキック公爵夫人。はゝ、男の方の知つた事ではありませんよ。婦人とは違ひますからね。妾達は性質が善いんだし。少くとも妾達のあるものはね。だが、妾達は全く隅っこに押し込めれらてるわね。妾等の夫達は、時々じらしてやらないと、實際、妾達の存在を忘れますからね、じらしてやるだけの、確かな法律上の權利を、妾達が持つてゐるといふことを見せつけてやるの。

ダーリントン。結婚のゲームてッ、妙な事ですね、公爵夫人（おくさん）——ゲームてッ、そんな事はすたれかゝつてゐますよ——細君は皆んな佳いカルタを持つて、何時もくだらないカルタは殘して了います。

バーウキック公爵夫人。くだらないカルタをですつて？それは亭主の事？。ダ

ーリントンさん。

ダーリントン。さうね、寧ろ現代の亭主に對する尤も佳い名かも知れませんね。

バーウキック公爵夫人、ダーリントンさん貴方は、隨分腐れた方ね！

ウキンダーミア夫人。ダーリントンさんは平凡な方よ。

ダーリントン。まあ、そう仰有しやらずに、奥さん。

ウキンダーミャ夫人。では、貴方は人生といふものに關しては何故そうつまらない事を仰有しやるのです？

ダーリントン。何故といへますと、私は人生といふものは極めて重大なものと考へ、これまで、それを眞面目に談つたからです。（身動ぎをなし）

バーウキック公爵夫人。何を仰有しやつたの？妾の鈍いのに免じて、ダーリントンさん、貴方が、實の處、何を仰有しやつたのか説明して下さいまし。

ダーリントン。（テーブルの後に來乍ら）説明は辭めませう。公爵夫人、現代に於ては説明よりは理解です。左樣なら！（公爵夫人と握手す）それから——（舞臺に出て）奥さん、左樣なら。今夜は來るかも知れません、來ちやいけない？來さして下さい。

ウキンダーミヤ夫人。（ダーリントン卿と舞臺に立ち乍ら）え、何卒。ですが貴方は馬鹿をいふのは御制止なさいよ、皆さんにも惡いわ。

ダーリントン（笑ひ乍ら）、はゝ！貴方は、私を改心させやうとしてますね。人間を改心させるのは危險な事ですよ、奥さん。（挨拶をしてCより退場）。

バーウキック公爵夫人。（立ち上り、Cに行き）なんて面白い、憎くらしい方だらう！妾はほんに好きだわ、あの方を。行つて了つて嬉しい。まあ、貴女は綺麗だわね！貴女の上衣は何處で御求めになつて？それから、貴女にはほんとに氣の毒だよ。マーガレットさん。（ソファに行つて、ウキンダーミア夫人と一所に坐る）

アガサや！

アガサ。はい、お母さん（立ち上り）

バーウキック公爵夫人。妾が見た寫眞のアルバムを見に行きたかない？

アガサ。え、お母さん（テーブルに行く）。

バーウキック公爵夫人。娘は！あれはねえ、スキッルランドの寫眞が好きなの。これらは純潔な趣味でしてね。だが、妾はほんに貴女には氣の毒だよ、マー

ガレットや。

ウキンダーミヤ夫人。（突ひ乍ら）何故？公爵夫人。

バーウキック公爵夫人。まあ、あの恐しい女の事でさ。あの女は程よく裝つては居るが、それがまた惡くなつて、怖しい例を胎すのだよ。アウガスタスを――御存知で入らしつて、私のあまり譽められない兄さ――仕樣のない――さあ、そのアウガタスがすつかりあの女にまいつて了つて。それが、全く耻しいので、何故つてあの女は社會には全く出られない女なのですからね。大概の女は一つの過去を持つてゐますが、だが、あの女には少くとも一ダースの過去を持つてゐるといふ話で、して、その一ダースが、皆んな惡いのですつてから。

ウキンダーミヤ夫人。御話の女ッてッ、一體誰方なんです？公爵夫人。

バーウキック公爵夫人、イレーネ夫人の事でさ。

ウキンダーミヤ夫人。イレーネ夫人？あの方の事は、些つとも存知ませんが公爵夫人。妾とは什んな關係があるんですの？

バーウキック公爵夫人。娘や！アガサや！

アガサ。はい、御母さん。

バーウキック公爵夫人。廣場へ行つて落陽でも見たかないかね？

アガサ。え、御母さん（L窓から出て行く）

バーウキック公爵夫人。娘や！落陽でも拜もうよ！氣晴しにさ、拜まない？自然にも勝るものはないさ、此の世には。

ウキンダーミャ夫人。ですが、什んな事なの？什んな理由で、妾にあの女の事を話したのです？

バーウキック公爵夫人。眞實に、御存知ないの？その事では皆んな氣を揉んでゐるんだよ。たつた昨晩ジャンセン夫人の御宅で、隨分な事だつて、皆さんが話したんだよ、ロンドン中の男の中の男で。ウキンダーミャは何故あんな事をしたのだらうッて。

ウキンダーミャ夫人。妾の夫が――そんな階級の、どんな女と、何をしたんです？

バーウキック公爵夫人。まあ、お前何が眞實だつて？　、それが大切なんだよ。彼の人はね、繁々と、あの女を訪ねて、ある時は數時間も居て、其の間

は誰方にも留守をつかつてさ。大概の婦人は、あの女を訪ねないが、然し大勢の餘り譽められない男を朋友に持つて居るんだよ――私の兄はまだ別だがね――お前に話した――それが、まだどうした譯かウキンダーミャには悲しい事なんだよ。妾達は、ウキンダーミャを模範的の夫だと、思つては居るものゝ、然し御氣の毒だがそれが疑いもないのだよ。妾の姪達――サビルの女達を御存知かい、御存知ない？――淑かな世話女房さ――可愛相な、眞實に可愛相な、だが、性の佳い――それで、女達は始終窓の側で編物や、刺繍などをして、まだ、此のやうな、怕しい社會組織の時代には有益になる貧乏人の爲めには醜い仕事までして、まだ、此等の可愛相な女達はその貧乏人等の――あんな上品な街と、眞正面のカーゾン街に住んで居るのだよ！　妾達は什う

なる事やら妾には判らない！　女達の話によるとウキンダーミヤは一週間に、四度乃至五度は其處へ行くのを――それを見たつて。仕方がない――大抵は悪口は言はないものゝ――女達は――善くも言はない、無論――女達は――御互に目ひき袖ひきはする。其の中でも一番惡いのは此の女が、ある男から大金をせしめたといふ話だよ。なんでも、その女は半年前、素手でロンドンに來たのだが、今ではメーフェルに綺麗な家を持ち、小馬で日毎の午後、まだ、一日中公園を乘り廻し――そう、一日中――それ以來女は憐れなウキンダーミヤを知つたのだつて。

ウキンダーミア夫人。まあ、信じられない！

バーウキック公爵夫人。だが全くの事實だよ、お前。ロンドン中に知れ渡つた。

だから、妾は、お前の處へ來て、ウキンダーミヤを早速ハンプルグか、アックスに連れ出しなさいと忠告したら良かつたと思つたのさ。そうすれば、ウキンダーミアにも、何か面白い事もあるだろうし、また、お前も始終亭主の番が出來るだろうと思はれるから、實の處、お前、妾がね始めて結婚して後ち時々病氣のやうに見せかけてはひどく氣持の惡い鑛泉を飲ませられたものさ唯だ、バーウキックを市外に連れ出し度いばかりに。夫は、至つて情にもろい性だつたの。妾が制止めたものゝ夫は誰方にも大金を與るやうな事はしなかつたよ。その方にかけては仲々高くとまつて居たの。

ウキンダーミア夫人。（止め乍ら）公爵夫人、公爵夫人、駄目ですよ！（立つて舞臺を横ぎり扉Cに赴く）妾共は結婚して漸つと二年なのですもの。小供は、生れて漸

つと六月なのですもの。（Lテーブルの R椅子に坐る）

バーウキク公爵夫人。まあ、可愛い赤ちやん！　什んなに、小さい赤ちやんでせうね？　男？　女？　女で欲しいわねえ！　まあ、いや、男でせう！　つまらないわね。男は自墮落ですから。妾の小供も始末に了へない自墮落者で。家へなんか何時歸へるか判りやしないの。二三月前オックスフォードを卒業たのですが――何を敎つたことやら妾にはとんと判りやしない。

ウキンダーミヤ夫人。男つて、皆んな惡いものでせうか？

バーウキック公爵夫人、まあ、大概、お前、例外もなく大概さ。まだ男は決して善くはならないよ。年齢はとつても決して善くはならないさ。

ウキンダーミヤ夫人。ウキンダーミヤと、妾とは愛の爲めに結婚したのです。

バーウキック公爵夫人。そう、妾達もそのやうに始つて、バーウキックの殘忍な、死ぬ程恐しい脅かしに逢つて、唯だ、もう言ふなりほうだいになつて了つて、それから、一年も經たない中にあちら、こちらの女を追ひ廻したので、色艶の美しいのや、姿の佳いのや、程の佳いのを。眞實の處、新婚旅行も過ぎない中に些つと小綺麗な下女に色目をつかつたのを見附けましたので。早速文句なしに下女を出して――いや、妾の妹の處へやつたの。まあ、あのジョージさんなら近眼だから何事もあるまいと思つたが、だが、やつぱり――非常な不幸な事ではあつたものゝ、やつぱり。（立ち上り）さて、妾は御飯を食べに行かなければならないの、まあ、夫の些しばかりの失敗などには餘り深く心配なさらん方が好いよ。夫を連れ出すものがあつても、やつぱり、お前の處へ

歸つて來るさ。

ウキンダーミヤ夫人。妾の處へ歸つて來ますつて？（扉C）

バーウキック公爵夫人。（L・C）そうよ、お前、あの惡い女達が妾達の夫を連れ出して行つてもやつぱり歸つて來るさ。無論、些しの金は費ふがね。立ち廻りはお止め、人達が嫌がるよ！

ウキンダーミヤ夫人。公爵夫人、御親切に、御出で下すつて色々御話して下さいまして、然し、夫が妾に虛言をつくといふ事は信じられませんの。

バーウキック公爵夫人。お前！　妾も、嘗てはそうだつたよ、今では凡ての男は怪物だと判つたのだよ。（ウキンダーミヤ夫人はベルを鳴す）唯だ、憐れなものには美味しく食べさせるのが、何よりさ。善いコックは、不思議な藝當をする

ものだよ。お前も善いコックがあると思ふがね。マーガレットや、泣きやしないかね？

ウキンダーミヤ夫人。御心配には及びません、公爵夫人、決して泣きやしませんから。

バーウキック公爵夫人。それが宜いのだよ。泣くのは醜い女の保護であつて、美しい女の破産であるのだよ。娘や！

アガサ、（Lより入る）はい、お母さん（テーブルL、Cの背に立つ）

バーウキック公爵夫人。來て、奥さんに御暇乞をなさい、御訪ね申して樂しがつた御禮も。（再び降る）、途中、次手に手紙を屆けて御呉れな、ホッバーさんの許へ—あの方は近頃、世間の注目を惹いてる金持の濠太利人だよ。あの方

の御父さんは圓型の錫に入つた、ある食物——大變美味しいのを賣つて非常な財産を慥へたので、なんでもその食物といふのは雇人等には嫌はれて、子息達には好かれるものらしいのだがね。あの方はアガサの上手な話には迷はされてゐるらしいよ。無論、娘を手放すのは辛い事だが、然し、娘と離れない母親は、常に、眞の愛情を持つてゐないものと思はれる。妾達は今晩來ますよ(ドーカー扉Cを開く)、それから妾の忠告通り早速亭主を連れ出すさ、それが何よりだから。左樣なら、何れ、まだ。御出でや、アガサ。

(公爵夫人とアガサ扉Cより退場)

ウキンダーミヤ夫人。まあ、怕しい！ダーリントンさんの、結婚して二年しか經たない夫婦の虛構の例話の意味が今になつて判つた。まあ！信じられない

——男があの女に莫大な金を拂つたといふ公爵夫人の話が。妾はアーサーが保管してる、あの人の會計簿の有處を知つて居る——あの机の引出中の一つの中だ。探し出さうかしら、探し出さう。(引出を開く)いや、とんだ間違だ。(立つて扉Cに行く)、馬鹿々々しい疑いだ。あの人は妾を愛するのだ！愛するのだ！だが、什うして妾は見ないのだろう？　妾はあの人の妻だ、見る權利を持つてゐる！(再び机に行つて、帳簿を取り出し一枚、一枚繰り調べる、笑つて、安心の表情をなす)、判つた！こんな馬鹿々々しい話には、眞實の事なんかありやしない。(帳簿を引出に納め、再び立ち上つて他の帳簿を引出す)　第二の帳簿——內密の——錠をかけた！(開けやうとして、失敗る。机の上の紙切ナイフを見て、それをとつて帳簿を切り最初のページより調べ始める)　イレーネ夫人へ一六〇〇磅、イレーネ夫人へ一七〇〇磅、

イレーネ夫人へ一四〇〇磅、まあ、眞實だ！眞實だ！まあ！怕しい！（帳簿を床の上に投げる）

（ウキンダーミヤ卿扉Cより登場）

ウキンダーミヤ。おや、お前、扇は未だ着いて居ないかい？（RCに歩み乍ら）マーガレットや、お前は私の帳簿を切り開いだね。お前にはそんな事をする權利はないよ！

ウキンダーミヤ夫人。貴方は、見附かつたのが惡いと思ひますの、思ひませんの？

ウキンダーミヤ。妻が、夫を探偵するなんて間違つた事だ。

ウキンダーミヤ夫人。貴方の探偵は致しませんでした。半時間前迄は此の女の

ある事が妾には些つとも判らなかつたのです。妾を、憐れんで呉れたある人が親切にも最早ロンドンでは誰も知つてると、話して呉れました——貴方がカーゾン街に毎日御出でなさる事を、貴方の狂者じみた鼻下長が、此の穢しい女に莫大な金を浪費つて！（Lに行く）

ウキンダーミヤ。マーガレット！　イレーネ夫人のそのやうな事を喋舌るんじやない、どんなに間違つた事かお前には解らんのだ！

ウキンダーミヤ夫人。（夫の方を向き乍ら）貴方は、大變イレーネ夫人の事を嫉妬いてゐますが、少しは妾の事も嫉妬いて下さい。

ウキンダーミヤ。お前の名譽には觸られないよ、マーガレット。當分の中は考へずに默つてお置き——（帳簿を机に納める）

ウキンダーミヤ夫人、貴方は、お金を怪しげに御消費いなさつたこと思ひます。唯だそれだけ。まあ、お金の事は氣に懸けません。妾の知つてる處では或は、貴方は妾の持つてる凡てのものを消費つたかも知れません。然し、妾が氣遣はれるのは妾を愛して呉れ、妾に、貴方を愛するやうにと敎へて下さつた貴方が、清らかな愛から、金で求めた穢しい愛に移り行く事なのです。まあ怕しい！（ソファに坐る）。して、妾は、貶されたと感じ！　貴方は如何やうにも感じません。妾は、汚がされたと感じ、全く汚がされたのです。過ぎ去つた半年が私には、今、どんなに怕しく見えますか貴方には判りますまい——貴方が、妾になさつた凡ての接吻は妾の記憶に染みて居ります。

ウキンダーミヤ。（夫人の傍に行き乍ら）。お默りよ、マーガレット。此の世の中でお

前より外に誰も愛しやしないよ。

ウキンダーミヤ夫人。（立ち上り）、それで、此の女は誰方ですの？何故、貴方は女に家をやつたのです？

ウキンダーミヤ。家なんかやりやしないさ。

ウキンダーミヤ夫人。お金を與つたら同じ事です。

ウキンダーミヤ。マーガレット、私の知つて居るイレーネ夫人は——

ウキンダーミヤ夫人。夫があるんですつて——若しくは架空の人ですつて？

ウキンダーミヤ。あの女の夫はずつと以前に死んで了つたのだ。此の世にひとりぼつちさ。

ウキンダーミヤ夫人。親戚もない？（間）

ウキンダーミヤ。ない。

ウキンダーミヤ夫人。變ですわね、でない？（Lにて）

ウキンダーミヤ。（テーブルLCに歩き）マーガレットや、私はお前に話して——

お前に聽いて呉れと言つたね——そら、私の知つて居るイレーネ夫人の事さ、あの女は身じまいの良い女だよ。若し四五年前——

ウキンダーミヤ夫人。まあ。（RCに行き）妾は、あの女の一生涯の細かしい目錄は要りません！

ウキンダーミヤ。（C）。私は、お前にあの女の一生涯の細かしい目錄を與ろうとするのではない。唯だ、是れだけ話すのだ——イレーネ夫人も以前は重んぜられ、愛せられ、敬せられた事をだ。あの女も素性も善く、地位もあつた

が——何も、かも失くした——寧ろ捨てたのだ。それがひどく傷しい事になつたのだ。人間は不幸には堪えられる——不幸は外部より襲い來り、まだ偶然なものだ。だが、然し自分の缺點を忍ぶ處に——おゝ！——人生の苦痛があるのだ。まだ二十年も前だつた。あの女がほんの娘つ子であつた。妻としては寧ろお前よりは間が短かゝつたのだ。

ウキンダーミヤ夫人。あの女の事は聽き度くありません——また——貴方があの女と同じ呼吸で私にも話されては困ります。それは、趣味の錯誤です。（テスクの側なる、R椅子に坐る）

ウキンダーミヤ。マーガレット、お前はあの女を救ふ事が出來ないかい。あの女は再び社會に出たがつて居る。それから、お前に救助を求めて居るのだ。

（夫人に近寄る）

ウキンダーミヤ夫人。妾に！

ウキンダーミヤ。そう、お前に、

ウキンダーミヤ夫人。なんて、圖々しい女だらう！（間）

ウキンダーミヤ。マーガレット。お前の承諾を得やうとし未だ承諾を得ないが妾がイレーネ夫人に大金を與つた事がお前には決して判るまいと思つて、やつぱり見抜かれたものとはいふものゝ。あの女を今晩の催しに招待して貰い度いのだ。（夫人のテブールLの側に立ち作ゥ）。

ウキンダーミヤ夫人。貴方は、狂者だ！（立ち上る）。

ウキンダーミヤ。御願だよ、人はあの女の事を兎や角の噂はするかも知れない

が、無論、然し世間ではあの女の事も確かとは知らない。あの女は色々な家に居た——お前の行きたかない家に、まあ、宜い、だが世の所謂交際社會にある女の行く處へは未だ行かないのだ。それがあの女の不滿足なのだ。お前に一度招待して貰い度がつて居るのだ。

ウキンダーミヤ夫人。あの女の勝利としてですか？

ウキンダーミヤ。いゝや。だが然しあの女はお前が善良な女である位は知つてる——それから、あの女が一度此處へ來たなら、あの女が幸福な女となる機會は得られ、あの女が從來に味いたよりも平穏な生活が得られるのだ。あの女はお前と懇意にならうとあくせくするのではない。社會に出だがつて居る女を救ふ氣はないのかい？

ウキンダーミャ夫人。いえ！眞から殘悔しないなら、あの女を失敗らせさもなければあの女の失敗を見た社會に決して出たくはありますまい。

ウキンダーミャ。御願ひだよ。

ウキンダーミャ夫人。（扉Rに近寄り乍ら）。晩餐の服裝をしに行くのです、それから今晩の事は二度と喋舌らないで下さい。アーサー、（夫の傍のCに歩き乍ら）貴方は私が父も、母もない此の世の中で、獨りぼつちであると思つてゐらつしやる。それで貴方は妾を御自分の欲しいまゝに、待遇つてるのです。御間違ひです、妾には朋友があります、澤山の朋友が。

ウキンダーミャ。（L、C）マーガレット、お前は馬鹿を言つてるよ、向見ずのお前と、論爭はし度かないが、然し今晩イレーネ夫人を招待する事は飽くま

でも主張する。

ウキンダーミャ夫人。（R、C）、そんな親切はてんで持ちまん。（L、Cに行き乍ら）。

ウキンダーミャ。お前は拒むのか？（C）。

ウキンダーミャ夫人、きつぱり！

ウキンダーミャ。まあ、マーガレット。私の爲めだから招待をせ、あの女の最後の機會だ。

ウキンダーミャ夫人。妾となんの關係があるのですか？

ウキンダーミャ。善良な女ッて、强情なもんだな！

ウキンダーミャ夫人。惡い男ッて弱いものね！

ウキンダーミャ。マーガレット、男で自分の結婚した女に親切でないものある

まい――それが眞實だよ――だがお前は私が嘗て親切であつたとは思はない――まあ暗示ッてものは不思議なものだ！

ウキンダーミヤ夫人。何故、貴方は他の男と違つてますの？ロンドンにはある穢しい情慾の爲めに自分の生涯を臺なしにしない亭主は稀だと聞きましたが。

ウキンダーミヤ。私は其の中の一人ではない。

ウキンダーミヤ夫人。信じられません！

ウキンダーミヤ。心では信じてるさ。だが二人の仲を惡くはするな。神樣は御存知だ、最後の二三分間が吾々を遠く離れさせる事を。坐つて手紙をお書きよ。

ウキンダーミヤ夫人。どうしても書きません。

ウキンダーミヤ。（机の處へ行つて）では私が書く！（電鈴ベルを鳴し、坐つて手紙を書く）。

ウキンダーミヤ夫人。貴方はあの女を招待しなさろうとしますの？（夫に迫る）

ウキンダーミヤ。そうだ。

（間、バーカー登場）。

バーカー。閣下（L、Cを降る）

ウキンダーミヤ。此の手紙をカーゾン街八十四番地のイレーネ夫人の許へ持つて御出で（L・Cに行つて、手紙をバーカーに渡す）。返事はいらないよ！

（バーカー退場）。

ウキンダーミヤ夫人。アーサー。若しもあの女が此處へ來たなら、妾は耻をかゝ

してやりますよ。

ウキンダーミヤ。マーガレット、そんな事を言ふものではないよ。

ウキンダーミヤ夫人。やつて見せます。

ウキンダーミヤ。おい、お前がそんな事をするとロンドン中の女でお前に同情するものはなくなるよ。

ウキンダーミヤ夫人、ロンドン中で妾を賞めない女はありません。妾達は餘り寛か過ぎて居ました。妾達は慣例を造らねばなりません。妾は今晩始めるやうに申し出でます。（扇を拾ひ上げ）。そう、貴方は今日扇を妾に呉れましたね。これが貴方の誕生日祝の贈物でした。若しもあの女が宅の閾を殷いたなら妾はこれであの女の顔を毆つてやろう。

ウキンダーミヤ。マーガレットお前はそんな事をしちやいけないよ。

ウキンダーミヤ夫人。貴方の知つた事じやありません。（Bを動く）。

（バーカー登場）。

バーカー。はい、奥様。

ウキンダーミヤ夫人。妾は自分の室で御飯を食べやう。妾は御飯は欲しくないほんに。十時半迄には凡て準備が整ふね。それから、バーカー、今晩、御客様の名を妾に明瞭といふのだよ。時々妾が見失しなつたらお前が早速いふのだよ。妾は名前を明瞭と聞くのが、殊更に心配なのだから、間違ひないやうにするのだよ。解つたかい？バーカー。

バーカー。畏りました、奥様。

ウキンダーミヤ夫人。そうするだろうね！

（バーカー扉Cより退場）

（夫に話しかける）アーサー、若しも、あの女が茲に來ましたなら——貴方に警告を與へます——

ウキンダーミヤ。マーガレット。お前は私達を臺なしにする氣か！

ウキンダーミヤ夫人。おゝ、此瞬間より妾の生活は貴方の生涯から分れるのです。ですが若しも貴方が世間の誹を避け度いのなら、早速あの女に手紙を置いて、妾が、あの女が此處へ來る事を禁めたと御知らせなさい！

ウキンダーミヤ。私はしない——私には出來ない——あの女は來なければなら

ないのだ！

ウキンダーミヤ夫人。それなら私は言つた事を屹度やります。（Bに行く）貴方の自由にはなりますまい。（Bより退場）

ウキンダーミヤ、（妻を呼び乍ら）、マーガレット、マーガレット！（間）神樣！私は如何いたしましせうか？。私は妻にあの女が眞實は誰であるかを話さない。妻は慚死するだろう。（椅子にうづくまり、掌に顏を埋める）

——幕——

第二幕

舞臺

ウキンダーミヤ家の應接間、扉R、Uは樂隊の音盛んなる舞踏室に向つて開かれ、扉Lを通つて客が入つて來る、扉L、Uは電飾の輝ける廣場に向け開かる。棕櫚、草花、輝ける光。室は客に充たされ。ウキンダーミヤ夫人は客に挨拶して居る。

バーウキック公爵夫人。（扉Cの上段にて）まあ、可怪（おか）しいわね、ウキンダーミヤさんもゐないし。まだホッバーさんも大變遲い。アガサやお前彼の人と五回のダンスを約束したのかい？（下り乍ら）

アガサ。さうよ、お母さん。

バーウキック公爵夫人。（ソファに坐り乍ら）お前の案内狀をお見せ。まあ、ウキンダ

ーミャの奥さんが、前の案内狀をそつくり繰り返したので良かつた。――斯うして呉れゝば母親としてはもう何よりだ。ねえ、嬢や！（二人の名をかきむしる）あんな格段な、若い息子とワルツを踊つた女はまだとあるまいよ！　それがまだ如何にも仲良しに見えてねえ！　最後の二つの舞踏はお前ホッバーさんと廣場で踏るんだよ。

（ダムビーとプリムダル夫人とが舞踏室より來る）

アガサ。え、御母さん。

バーウキック公爵夫人。（扇をつかひ乍ら）氣が晴々して佳い氣持だ。

バーカー。クーバー　クーバー夫人。スタットフイルド夫人。ジイムス　ロイストン殿。ゲーバークレー殿が御見えになりました。

（人々入り來る）

ダムビイ。スタットフイルドさん、今晩は。これが季節の最後の舞踏になるでせうね？

スタットフイルド夫人。さうでせうねえ、ダムビイさん。でも樂しい季節でしたわねえ、でなくつて？

ダムビイ。全く樂しい！　公爵夫人、今晩は。これが季節の最後の舞踏になるでせうね？

バーウキック公爵夫人。さうでせうね、ダムビイさん。でもだいたい季節でしたわねえ、でなくつて？

ダムビイ。恐しくだれた！　恐しくだれた！

クーバー　クーバー夫人。ダビムイさん、今晩は。これが季節の最後の舞踏になるでせうねえ？

ダムビイ。いゝや、さうでもありますまい。少くともまだ二回位はありますでせう。（プリムダル夫人を顧みる）

バーカー。ラホールド殿。ジデブルグ夫人。グラハム嬢。ホッバー殿が御見えになりました。

（人々入り來る）

ホッバー。如何です？奥さん。如何です？公爵夫人。（アガサに挨拶する）

バーウキック公爵夫人。まあ、ホッバーさん早く御出でになりまして大變宜う御座いました。貴方はロンドンでは大變歡待るそうで。

ホッバー。大都會、ロンドン！　ロンドンはシドニー程ではありませんよ。

バーウキック公爵夫人。さあ！妾達はもう貴方の事は好く存じて居ますのよ、ホッバーさん。貴方のやうな方がもつとありましたらねえ、世の中も容易いものになつたでせうが。御存知でゐらしつて、ホッバーさん、アガサと妾とは大變オーストラリヤが好いてるのを。小さい、可愛いカンガルーが飛び廻つて居てさぞ面白いでせうね。アガサは、オーストラリヤを地圖で見たんですよ。なんて不思議な恰好ですよねえ、ほんに大きな荷物を包んだみたいでさほんの近頃開化た國であるものゝ、じやなくつて？

ホッバー。他の國と同じ時代に創られたのではないのですか？公爵夫人。

バーウキック公爵夫人。まあ、お上手でゐらつしやること、ホッバーさん。貴方な

どは全く御上手な方で。妾などは御相手になりませんよ。

ホッパー。アガサさんとは踊つて見度いのですがね、公爵夫人。

バーウキック公爵夫人。さあ、どうぞ、娘も踊る筈なので。踊るだらうアガサや？

アガサ。さうよ、お母さん。

バーウキック公爵夫人。早速？

アガサ。え、御母さん。

ホッパー。では踊つても宜う御座いますか？（アガサ挨拶をする）

バーウキック公爵夫人。ではホッパーさん、妾とこのお轉婆には隨分御氣を注けなすつて。

（アガサと、ホッパーとは舞踏室へ行く）

（ウキンダーミヤ卿Lより登場）

ウキンダミーヤ。マーガレット、お前に話し度い事がある。

ウキンダーミヤ夫人。些つとの間。（音樂喝む）

バーカー。アウガスタス　ロートン卿

（アウガスタス卿登場）

アウガスタス。奥さん、今晩は。

バーウキック公爵夫人。ジイームスさん。舞踏室へ連れて行つて下さいませんか？　アウガスタスとは、今晩夕飯を一所に濟したばかりで、もうすつかり飽きたんですから。

（ジイームス　ロイストンは、公爵夫人に手を取らせ乍ら舞踏室へと行く）

バーカー。バウデン殿御夫婦。ペースレイ閣下御夫婦。ダーリントン卿。

（人々入り來る）

アウガスタス。（ウキンダーミヤに近寄り乍ら）内密で話すがね、お前。それは噂に聞いたので。見たのではないが。世間には私達の眞實の處を見て呉れる人は一人だつてありやしないよ。くだらない善事もさ。私の知り度いのはこれだ。彼の女は一體誰かい？　何處から來たのかい？　何故彼の女はくだらない親類を持たないのかい？くだらない邪魔物、親類をだ！　だがそんなものは人間をくだらないものにさせるんだよ。

ウキンダーミヤ。貴方はイレーネ夫人のことを話してるのでせうね？　私は半年前に逢つたばかりで。それまでは、彼の女の事なぞは些つとも知らながつ

たのです。

アウガスタス。それからは、始終逢つたのだろう。

ウキンダーミヤ。（冷かに）そうです、それからといふものは始終逢つて居ました。たつた今も逢つたばかりです。

アウガスタス。ほんに、女達は彼の女をひどく輕蔑んで居るよ。たつた今アラベラと夕飯を一所に濟したのだが、これ！　彼女がイレーネ夫人に就て話した事を聞けよ。彼女は彼の女を嘲りはしない……（私かに）バーウキックと私は彼の女を頗る別賓にあり勝な、問題の女としてソッとして置くやうにと彼女に話して置いたのだ。お前はアラベラの容姿を御覽……！だが、考へも て見ろ、お前。イレーネ夫人には如何したら宜いのか私には解りやしないのだ

ほんに、私は彼の女に結婚を申し込んだとしたら、彼の女は私を至つて冷淡に待遇つたゞろう。まだ彼の女は魔のやうに悧巧だ！　彼の女は何事でも説明する、ほんに、お前に説明して見せる、お前に説明しなければならないものを澤山持つて居る――して悉くそれが異つたものだ。

ウキンダーミヤ。イレーネ夫人と、私との友情に關しては何等の説明も要りません。

アウガスタス。ふん、まあ、氣を注け、好い年につなてる癖にお前彼の女が嘗ては社會と呼ぶこのぐだらない中にあつたと思ふかい？　彼の女をお前の家内に紹介する氣かい？　まあ藪をつゞく必要もあるまい。さうする氣かい？

ウキンダーミヤ。イレーネ夫人は今晩御出でになります。

アウガスタス。お前の家内は案内狀を送つたのかい？

ウキンダーミヤ。イレーネ夫人は案内狀を請取つたのです。

アウガスタス。そこで、彼の女も占めたものさ。おい。だが、何故その事を前に話さなかつたのか？　そうさへすれば私も非常な心配や、くだらない間違をせずに濟んだのだ！

（アガサと、ホツバーとはL、U、Eを通つて廣場へと出て行く）

バーカー。セシル　グラハム殿。

（セシル　グラハム登場）

セシル　グラハム。（ウキンダーミヤ夫人に輕く挨拶をし、行つてウキンダーミヤと握手）アー

サー君、今晩は。何故御機嫌伺をして呉れなかつたのかい？　僕は人に御機嫌伺をされるのが好きだ。そうされるのが僕の健康上に非常に佳い事なのだがさて、今晩は一向に氣分が佳くない。家族のものと一所に夕飯を濟したが一體家族といふものは何故何時もくだらないものだろう？　夕飯が濟むと親父は道徳を說くのが習慣だ。すればお父さんは道を知るには、良い加減な年頃だと言つてやるのだ。だが僕の經驗に依れば道徳といふものを良く解る年頃になると、彼等は何もかもすつかり解らなくなつて了ふのだ。いや、タッピーさん！　まだ結婚するんですつてねえ、そんな遊戯には貴方も大概飽きだろうと思ひますがね。

アウガスタス。お前などは極めて平凡なものだよ、おい、極めて平凡だよ！

セシル　グラハム。序ですがね、タッピイさん、一體何方なんです？貴方は二度結婚して一度離別したのか、まだ二度離別して一度結婚したのかい？二度離別して一度結婚した方なのでせう。どうもそうらしいね。

アウガスタス。記憶が惡いのでね。何方が眞實なのか思ひ出せないよ。（Rは去る）

プリムダル夫人。ウキンダーミヤさん。特に貴方に御訪ねし度い事がありますがね。

ウキンダーミヤ。恐れ入りますが——御勘辨が出來ますなら——私は妻の方に味方しなければならないので。

プリムダル夫人。まあ、そんな事を夢みてはいけませんよ。今時では公衆の前で夫が自分の妻に氣を留めるなんて頗る危險な事ですよ。そうすればつまり

夫婦限りの際には夫が妻を打つだろうなんて世間では思ひますからね。世間は、結婚生活のやうな樂しい事には何事にも極めて疑い深くなつてるのですからね。だが夕飯の時にそれはどんなものか詳しく話さうよ。（舞踏室の扉の方へ動く）

ウキンダーミヤ（）。マーガレットや、私は、お前に話さなければならない。

ウキンダーミヤ夫人。私の扇を持つて居て下さる？　ダーリントンさん。有難う。（ダーリントンの後へ下りて行く）。

ウキンダーミヤ。（夫人の側へ近寄り乍ら）。マーガレット お前が夕飯前に言つた事は實際、駄目だつたのかい？

ウキンダーミヤ夫人。彼の女は今晩來やしません！

ウキンダーミヤ。（B、Cの間に）イレーネ夫人は此處へ來るのだが、お前が彼女をいじめたり、怪我させたりしやうものなら、何の道お前は私達を愧しめたり、悲しめたりする事なのだ。それを考へても見ろ！　さあ、マーガレット！唯だ私を信ずるが宜い！妻は自分の夫を信ぜねばならないのだ！

ウキンダーミヤ夫人。（C）ロンドンは自分の夫を信ずる女で充され。人々もまだそれを認めては居ますが。それが極めて不幸であるやうに思はれます。私はその中の一人にはならないつもりです。（身動きする）。ダーリントンさん、何卒、妾の扇を返して下さいませんか？有難う……却々必要な扇ですからねえ、じやなくつて？、……今夜は味方が欲しいものです、ダーリントンさん。こん

なに早く欲しくなろうとは思はなかつたわ。

ダーリントン。奥さん！何時かは時が來るものと思つて居りましたが、然し何故今夜？

ウキンダーミヤ。私はあの女に話すつもりだ。話さねばならない。何事か起つたなら、非常に危險だと。マーガレット……。

バーカー。イレーネ夫人。

（ウキンダーミヤ立ち上る。イレーネ夫人登場、極派手な服裝でまだ至つて品位ある表情で。ウキンダーミヤ夫人扇をしつかり握らうとして床上に落す。夫人はイレーネ夫人が極めて丁寧に挨拶をするに拘らず至つて冷かに挨拶して、舞踏室へと

行く）。

ダーリントン。奥さん、扇を落しましたよ。（拾つて夫人に渡す）。

イレーネ夫人。（℃）。おや、如何で御座いますか？ウキンダーミヤさん。貴方の可愛い、奥さんは何んて美しいでせうね！まるで繪のやうだわ！

ウキンダーミヤ。（低い聲で）。恐しい向ふ見ずな事でしたよ！貴女が御出でになるなんて。

イレーネ夫人。（笑ひ乍ら）。妾の、一生涯中での、上手なやり方ですよ。序でに、貴方はね、今晩妾に十分御氣を注けなさるんですよ。妾には女が恐しいのですから。男なんて何時でも自由に出來ます。如何で御座います？アウガスタスさん。近頃は些つとも見返つて呉れませんわね。昨日から御目にかゝ

りませんわね。貴方にはもう實がないのですわねえ。衆さんがそう言つてよ。

アウガスタス。(R)。まあ、イレーネさん。言譯をしますから。

イレーネ夫人。(R・C)、いゝや、アウガスタスさん。言譯なんか御止めなさいな。それが貴方の何時もの手法なんですから。

アウガスタス。えッ！私に手法があると御思ひなら、イレーネさん——

(二人が話を續けてゐると、ウキンダーミャは不安らしげにイレーネ夫人を目戍乍ら室をあちら、こちらと歩いてゐる)

ダーリントン。(ウキンダーミャ夫人に)。なんて蒼白いんだらう！貴女は！

ウキンダーミャ夫人。臆病者は何時も蒼白いのです！

ダーリントン。如何にも喪氣したやうで。廣場へ出ませう。

ウキンダーミャ夫人。え。(バーカーに)バーカーや、私の外套を出して御呉れや。

イレーネ夫人。(ウキンダーミャ夫人に近寄り乍ら)。奥さん。御宅の廣場は、まあ、なんて綺麗でせうね、電飾が點いて居て。羅馬のドリヤ公爵家を思ひ出されてよ。

(ウキンダーミャ夫人は冷淡な挨拶をしてダーリントンと一所に出て行く)。

まあ、如何で御座いますか？グラハムさん。ジデブルグ夫人は、貴方の伯母さんじやなくつて？彼の方と御懇意になり度いわね。

セシル　グラハム。(些つとの間躊躇して、後ち當惑の體で)。さあ、何卒、御望みなら。カ

ロリン伯母さん、イレーネ夫人を御紹介いたします。

イレーネ夫人。ほんに嬉しう御座います、御目にかゝりまして、ジデブルグさん。（ソファの夫人の傍に座る）。貴女の甥さんとは大變懇意な仲でして。彼の方の政治的の經歷には此の上もなく趣味を持つて居ますの、ほんに、もう見事な成功をなさるに違ひないと思いますわ。彼の方は王黨員のやうに眞面目な思想を持つてゐながら、急進黨員のやうに熱烈な演說をなさいますが、もう今の世の中でそれが何よりでして。それにまだ華々しい雄辯家ですわね。ですが私共はその雄辯が誰方からの遺傳であるのか、判つてゐますの。ほんの昨日公園で、アランダル卿も申しましたの、グラハム君の演說は伯母さんのにそつくりだつて。

ジデブルグ夫人。（R）。貴女のやうなお方は大抵私にそんな面白い事を仰有しやいますわね！（イレーネ夫人笑つて、話を續ける）。

ダムビイ。（セシル グラハムに）。君はジデブルグ夫人をイレーネ夫人に紹介したのかい？

セシル グラハム。したよ。君。仕方がないさ！ 彼の女なら、なんでもあの女の思ふまゝにすることが出來るさ。譯は僕には判らない。

ダムビイ。願はくは彼の女が僕に話しかけなければ良いがな！（サキンダーミヤ夫人の方へぶらづく）

イレーネ夫人。（C。ジデブルグ夫人に）。木曜日に？ 樂しみにして。（立ち上り、笑ひ乍ちサキンダーミヤに話しかける）。恁んな婆臭い後家なんかに禮を盡さねばならない

つて、なんと厭な事だらう！だが彼の人達は始終矢釜しくそれを言つてるよ。

プリムダル夫人。（ダムビイに）ウキンダーミヤと話してゐる彼の派手な服裝をした女は誰方ですかい？

ダムビイ。何んでもないですよ！　佛蘭西の猥褻な小說「道樂物語の」やうなものので英國の市場では全く輕蔑されてゐるんです。

イレーネ夫人。プリムダル夫人とダムビイさんではあんまり情なさ過ぎる！

夫人（おくさん）は彼の方を大變嫉いてるつて話で。ダムビイさんは、今夜は妾に餘り愛想を仰有しやらないやうだ。多分彼の方が怕（こわ）いからだらう。あんな麥藁色をした婦人は恐しい氣質を持つてゐるものだ。さあ、貴方と踊るのが一番最初らしいわ、ウキンダーミヤさん。（ウキンダーミヤは唇を咬み、眉を顰める）　アウガスタ

スさんは嫉きなさるんだらう！　アウガスタスさん！（アウガスタス降りる）。ウキンダーミヤさんは妾と一番最初に踊つて呉れつて如何しても聽かないの、それが、さあ、彼の方が御自分の宅なもんだから、妾は拒絕することが出來ませんの。さあ、貴方とは、もつと誰とよりも早く踊りたがつたのですよ。

アウガスタス。（輕く挨拶して）そう出來たつたなら、イレーネさん。

イレーネ夫人。その方が遙かに宜いでせう。一生涯貴方と踊つてそれで、さあ、嬉しがつてる人が思はれてよ。

アウガスタス。（手を白短衣（チョッキ）の上に置いて）いや、有難う、有難う。凡らゆる婦人の中で貴女が尤も尊敬すべき婦人です！

イレーネ夫人。まあ、御上手な事！　簡單で、實（じつ）があつてさ！　わたし、そん

な言葉が大好きよ。さあ、妾の花束を持つて。（カキンダーミヤの手に捲ぜられ舞踏室へ行く）。まあ、ダムビイさん、如何？　此の間は三度とも留守をいたしまして大變失禮いたしましたわね。金曜日に御飯をお食べにいらつしやいましな。

ダムビイ。（全く冷淡に）有難う！

（ブリムダル夫人は憤怒を帶びた眼でダムビイを凝視し。アウガスタスは花束を持ち乍ら、イレーネ夫人とウキンダーミヤの背に從ひて舞踏室へ行く）。

ブリムダル夫人。（ダムビイに）お前はなんて非道い人間だい！　お前のいふ事は一つだつて信じられない！　何故彼の女を知らないて言つたのかい？　續け

ざまに三度も彼の女を訪問したのは何の意味かい？　あんな處へ御飯を食べに行つてはならないよ。無論、お前も承知だらうね？

ダムビイ。ラウラ伯母さん。行かうなんて思ひませんよ！

ブリムダル夫人。彼の女の名を未だ敎へないじやないの！　誰かい彼女は？

ダムビイ。（輕く咳拂いし、頭髮を撫で乍ら）イレーネ夫人です。

ブリムダル夫人。彼の女が！

ダムビイ。そうです。皆んなが訪問するのは彼の女です。

ブリムダル夫人。それは面白い！　全く面白い！　ではよく見てやらう。（舞踏室の扉へ行つて、室の中を見る）。彼の女に就いては面白い事を聞えてゐる。人々の話ではあのウキンダーミヤを破產させやうとしてゐるのだつて。そして其の

穿にかゝらうとしてゐるウキンダーミャ夫人が、彼の女を招待したとはなんて面白い事だらう！　全く好人物の女がする、實に馬鹿らしい事さ。お前金曜日に御飯を食べに行くね？

ダムビイ。何故？

プリムダル夫人。何故つてそうなら妾の夫を連れ行つて貰い度いからさ。彼の人は近來とんと機嫌がとり惡くゝなつて、今では全くの厄介者なんだから。そこで、この女こそ、彼の人に誂い向きといふものだ。彼の人なら彼の女が厭といふまで努めて踊の御相手をなさるでせうし、そうすれば、妾も、心配がないのだから。實際だがね、あゝ言つた種類の女は至つて必要なものだよ。彼女達は他人の結婚の基礎を確めて呉れるのだ。

ダムビイ。貴女はなんて不思議な方でせうね！

プリムダル夫人。（ダムビイを見乍ら）お前に行つて貰い度いね！

ダムビイ。實を云へば私も充分に知り度がつてる一人なのですが、然したつた今その機會がありまんので。

（彼等が舞踏室へ行くと、ウキンダーミャ夫人とダーリントンが廣場から入つて來る。）

ウキンダーミャ夫人。え。彼の女が此處へ來るといふことは實際恐しい。忍び難い事なので。貴方が今日、御茶の時に仰有しやつた事が判つてよ、何故正直に仰有しやらなかつたのですか？　仰有しやつて下されは宜いのに！

ダーリントン。駄目です！他人のそんな事なんか話せないじやありませんか！

ですが今夜貴女に彼の女を招待させやうとしたことが知つてましたなら、話したかも知れません。何れにしても、貴女の身に降りかゝつた災難ですよ。ウキンダーミヤ夫人。妾は招待しませんでしたの。夫が無理、やり招待しましたので――妾の願も聽き入れず――妾の言ふことにも背いて。おゝ！妾の家は汚がされた！此處に集つたすべての婦人は、妾の夫が彼の女と踊つてゐるのを見て妾を嘲笑してるやうな氣がする。妾は何をしたが爲めに此の嘲笑を受けるだろうか？妾は、妾の一生涯を夫に捧げた。夫は、それをとつた――それを利用した――それを汚がした！　妾は、自分の眼にも淺間しく見える。妾は元氣も消え失せた――妾は臆病者だ！（ソファに坐る）

ダーリントン。貴女に何もかも打ち明すものなら、貴女は此のやうに取扱ふ

夫と一所に居てはいけますまい！　一所に居た處でどんな生活が得られますか！　貴女は夫が何時も虚言をついて居たと感じられるでせう。貴女は夫の眼には虚僞が閃き、夫の聲は虚僞であり、夫の接吻は虚僞であり、夫の情慾は虚僞であつたと感じられるでせう。夫が他の色々の女に倦み疲れては貴女の側に來、貴女は夫を慰めなければならなかつたでせう。夫が他のさま〳〵な女に迷ひ込んでは貴女の側に來、して貴女は夫をいたわらなければならなかつたでせう。貴女は夫に對しては、夫の眞生活の假面となり、夫の秘密を隱す外套とならなければならなかつたでせう。

ウキンダーミヤ夫人。確かに――眞實です。ですが妾はどうなることでせうか？　貴方は妾の友達だと申しましたね、ダーリントンさん。――話して下さ

い、妾はどうしたら宜いでせうか？　妾の友達になつて下さい。

ダーリントン。男女の間柄には友情なるものを保ち得られません。情慾と、反抗と、尊敬と、愛があつても友情はありません。私は貴女を愛します。

ウキンダーミヤ夫人。いえ、いゝえ！（立ち上る）

ダーリントン。え、私は貴女を愛します！　私には世の中で貴女が何よりです。貴女の夫は貴女に何を與へましたか？　何も與へますまい。貴女の交際社會や、貴女の家庭に入り込んで來て、貴女に人前で耻をかゝせる、彼の穢しい女には色んなものを與へました。私は、私の生命を貴女に捧げます——

ウキンダーミヤ夫人。ダーリントンさん！

ダーリントン。私の生命——私の全生命。それをお取りよ、そして貴女の……

がまゝになさい、私は貴女を愛します——他の女にしたことのない程の强烈な愛で。貴女を見初めて以來愛して居たのです、盲目的に、崇拜的に、狂熱的に愛してゐたのです！　その時は御存知なかつたでせうが——今では御存知でせう！今夜此家を出なさい。世間がどうでも宜いとか、世間の批難はどうでも宜いとか、交際社會の噂がどうでも宜いのだとは申しません。批難や、噂は却（たか）々影響いたします。然し人間は自分の生活を充分に、完全に、徹底的に生活するか——さもなければ世間の僞善者が要求する虛僞で、淺薄で、賤劣な生活を生活するか——此の二つの中の一を撰ばねばなりません。今貴女は此の場合に當つてゐます。撰擇！　おゝ、あなた、撰擇をなさい！

ウキンダーミヤ夫人。（靜かにダーリントンの側を離れ、驚愕の目で彼を凝視す）、妾には勇氣

がありません。

ダーリントン。（夫人に次いて）ふん、貴女には勇氣があります。半年の間といふものは苦痛と不名譽とを忍んだのでせうが、然し貴女が夫の姓をもう名乘らない時は、私の姓を名乘る時で、そうなれば何もかも都合好く行くのです。マーガレット、私の戀人、私の妻と、何日かは斯う呼ぶ日が來るでせう――そうです、私の妻！　御解りつ！　今が如何です？　彼の女は當然貴女のものになつてゐる地位を奪つたのです。さあ、出ませう――出ませう、此の家を、公然で、貴女の唇には笑を浮べて、貴女の眼には勇氣を帶びて。ロンドン中では何故貴女が出て行つたかゞ判るでせう。誰が貴女を非難しませう？　誰もしますまい。まだした處でそれが何んです？罪惡？罪惡が何です？穢し

い女の爲めに自分の妻を捨てるといふことは、夫の罪惡です。自分を恥しめた男の妻たることは、妻たるものゝ罪惡です。何事にも妥協はしないと貴女は申しました。今は何人とも妥協はなさるな。勇敢で！　精神を確かになさい！　ウキンダーミヤ夫人。精神がどうかしたやうだ、考へさして下さい！　待たして下さい！　夫は妾に歸るかも知れません。（ソファに坐る）

ダーリントン。貴女は歸させるつもり！　貴女は私が思つたやうな方ではないのです。貴女は世間並の女そつくりです。貴女は世間の非難や、貴女が輕蔑しなさる世間の稱賛に面するよりも、寧ろ何事にも堪え得られる方でせう。一週間の中には貴女は彼の女と公園を乘り廻るでせう。彼の女は貴女の常客となり――貴女の尤も親しい友達になるでせう。貴女は、此の不思議な羈絆

をば一氣に破るよりも寧ろ何事にも堪え得られるでせう。確かに、そうです。
貴女には勇氣がありません。何もありません！
ウキンダーミヤ夫人。おゝ。考へる時を與へて下さい。只今は返事が出來ません。（神經的に眉に手をやる）
ダーリントン。今でなければ駄目です。
ウキンダーミヤ夫人。（ソファを立ち上り乍ら）それで駄目ですの！（間）
ダーリントン。貴女は私の心を破のるだ！
ウキンダーミヤ夫人。妾のは疾うに破られてゐます。（間）
ダーリントン。明日（あす）私は英國を去ります。これが貴女に御目にかゝる最後で御座います。もう二度と再び御目にかゝれますまい。私達の生活が出逢つた瞬間

に——私達の靈は觸れたのです。それらのものはもう二度と再び逢ひもしなければ觸れもしますまい。左樣なら。マーガレットさん。（退場）
ウキンダーミヤ夫人。妾はどんなに寂びしいだらう！　どんなに恐しく寂びしいだらう！
（音樂の音喝む、バーウキック公爵夫人と、ベースレー卿とは笑ひ乍ら他の客等と話して舞踏室より來る）
バーウキック公爵夫人。マーガレットや、妾はイレーネ夫人と、たつた今まで面白い話をしてゐたのだよ。前程、お前にイレーネさんの事を話したのは全く濟なかつた。彼の女だつて何もお前が招待したのなら、（やま）疼しい事はないのだよ。却々魅力を持つた女で、また人生には明瞭（はつきり）した意見を持つてゐるよ。一

度以上結婚した人は全然排斥すると言つたが、そうなればアウガスタスなんか全く安全なものさ。人はどうして彼の女の惡口を言ふのか判らないね。そんな事を言ふのは妾の怕い姪達さ――サビルの娘達――あれらは始終惡口ばかり言つてゐる。それから妾はハンブルグに行かなければならない、お前、眞實にだよ。彼の女は些つと魅力があり過ぎるやうだ。だがアガサは何處に居るのか知ら？　おや、彼處に居る！　（アガサとホッパーとは廣場より來りL、U、Eより登場）ホッパーさん、妾は貴女には隨分、隨分腹が立つてよ。貴方はアガサを廣場へ連れ出しましたが、娘はまだほんに氣が弱いのですよ。

ホッパー。（L、C）隨分ですね、公爵夫人。私達はほんの些つとの間外へ出て一所に話をしたのですよ。

バーウキック公爵夫人。（C）まあ、オーストラリアのことかい？　多分そうでせう。

ホッパー。そうです！

バーウキック公爵夫人。アガサや、娘や。（娘を呼ぶ）。

アガサ。はい、お母さん！

バーウキック公爵夫人。（私かに）。ホッパーさんは何か言つた――

アガサ。え、お母さん。

バーウキック公爵夫人。彼の方に何んて返事をしたのかい？　お前。

アガサ。え、お母さん。

バーウキック公爵夫人。（可愛らしげに）アガサや、お前は何時も正直だよ。ホッ

バーさん！　ジイームスさん！アガサは妾に何んでも話しますよ。御兩人ともまあ上手に秘してゐらつしやるわねえ。

ホッパー。アガサさんをオーストラリアへ連れて行つても關いませんか？公爵夫人。

バーウキック公爵夫人。（憤つた風で）。オーストラリアへ？まあ、そんな恐しい野蠻國の話はしないで下さい。

ホッパー。ですが御嬢さんは私と一所に行き度いと申しますよ。

バーウキック公爵夫人。（嚴格の口調で）アガサ。お前はそう言つたかい？

アガサ。え、お母さん。

バーウキック公爵夫人。アガサ、お前はなんて馬鹿な事をお言いだい。それよ

かも、グロスベナーの方が住んでどんなに身體に佳いか知れないよ。グロベナーにも野蠻な人間は居るが、然し恐しいカンガルーは匍ひ廻はつてゐないよ。だがそんな話は明日にしやうよ。ジイームスさん、アガサを連れていらつしやい。ほんに、小晝飯を食べにいらつしやいよ、ジイームスさん。二時じやなく、一時半に。公爵は確か貴方に少し申し上げ度い事があるでせうから。

ホッパー。公爵夫人。私は公爵と話をし度いのですが、公爵夫人。公爵は御逢ひ申してから一言だつて仰有しやいませんですよ。

バーウキック公爵夫人。明日は貴方にたんと申し上げる事があるでせうよ。（アガサはホッパーと共に出で行く）　では左樣なら、マーガレットさん。古臭い、古臭い話

だが。戀とは――さても、見初めの戀より、季節の終の戀が、遙かに滿足を與へるものだ。

ウキンダーミヤ夫人。左樣なら、公爵夫人。

（バーウキック公爵夫人はベースレー卿の手に擁せられて退場）

ブリムダル夫人。マーガレットや、お前の夫と踊つてゐる女はなんて綺麗な女だろうね！　妾がお前だつたらたんと嫉いたのだがね！　彼の女は夫の仲の良い友達なのかい？

ウキンダーミヤ夫人。いゝえ！

ブリムダル夫人。眞實かい？　左樣なら。（ダムビイを見乍ら退場）。

ダムビイ。ホツバーさんはなんて恐しい容姿をなさる方だろう！

セシル　グラハム。さあ、彼は眞實の紳士だよ、僕の知てつゐる惡い型の紳士でさ。

ダムビイ。賢明なるウキンダーミヤ夫人。多くの奥さん達はイレーネ夫人の來たのに反對であつたが。然しウキンダーミヤ夫人は常識といはるゝ非常識な事をしました。

セシル　グラハム。それから、ウキンダーミヤ君は、無分別程無邪氣に見えるはないといふ事を知つた。

ダムビイ。そうだ。ウキンダーミヤ君はほゞ現代人になりかゝつて居る。自分では望まないだろうが。（ウキンダーミヤ夫人に挨拶して退場）。

ウデブルゞ夫人。左樣なら、奥さん。イレーネ夫人はなんて氣持の佳い女だろう

ね！　彼の女は木曜日の小晝飯にはやつて來る事になつてゐるが、お前も御出でにならないかい？　牧師樣や、マートン夫人も來るのだが。

ウキンダーミヤ夫人。濟みませんが忙しいので、奥さん。

ジデブルグ夫人。殘念だね。御出でや、お前。（ジデブルグ夫人、グラハム壤退場）。

（イレーネ夫人、ウキンダーミヤ卿登場）。

イレーネ夫人。面白い舞踏だつたわね！　全く若い時の事が思ひ出されるわ。（ソフアに座る）。何處にでもあるやうに此處にも交際社會のほんの馬鹿が澤山居ましたわね。何事もなかつたので良かつたわね！　マーガレットの外は。彼女は可愛く育つたわね。最後に見たのは――二十年前だが、其の頃はまだフランネルに包まれた赤ん坊だつた。ほんにさフランネルの中に。公爵夫人

！　可愛いアガサ！　妾の恰度好きな女の恰好でさ。ほんに、さあ、ウキンダーミヤさん。若し妾が公爵夫人の義理の妹になれたなら――

ウキンダーミヤ。（イレーネ夫人の座つてゐるLに座る）然し貴女は――？

（セシル　グラハムは殘れる客達と共に退場、ウキンダーミヤ夫人は嘲笑と、苦痛の目でイレーネ夫人と、夫とを凝視す。二人は彼の女の居るのに氣がつかないでゐる）。

イレーネ夫人。え、そうよ！　彼の方は明日の十二時に來ますよ！今夜にして呉れと言つたの。實際。アウガスタスが、どんなに繰り返したか御分りでせう。あんな事は惡い癖よ！　だが、妾はね明日迄は返事が出來ないと言つたの。無論、ものにしますさ。妾は、彼の男を世間並の女房のやうな、お目出度

い女房にして見せますよ。アウガスタスには隨分御目出度い處があるわね。それが好い事には皆んな露出でさ。一體性質の善い處は何處にあるのだろう。無論、此の事件には貴方も加勢してくれるわね。

ダーリントン。私はアウガスタスを煽動てに訪問しますまいよ、多分。

イレーネ夫人。おや、では、妾が煽動てるわ。だが貴方は巧妙い具合にやつて下さいよね。ウキンダーミヤさん。お厭？

ウキンダーミヤ。（眉を顰め乍ら）今夜私に話し度い事があるといふのはそのことですか？

イレーネ夫人。そうよ。

ウキンダーミヤ。（忍び難い樣子で）。此處では話し度くはないのです。

イレーネ夫人。（笑ひ乍ら）。では、廣場へ行つて話しませうよ。仕事にさへも繪のやうな背景があるんだわね。そうじやない？　ウキンダーミヤ。適當な背景があれば女は何事でも出來るものですよ。

ウキンダーミヤ。明日にしては駄目？

イレーネ夫人。いえ、貴方、明日はね彼の方と逢ふことになつてゐますの。妾の思つた事は充分に話せれば好いと思つてますがね——なんと言いませうか？——一年に二千磅を三番目の從弟と——二度目の夫と——またそういつたやうなある遠い親類が殘して呉れたのだつて。それが何よりも好い手段でせうね。そうじやない？　ウキンダーミヤ。貴方は今妾に盡して呉れるには恰度好い時なんだがね、だが、盡すことには些つとも氣が利かないんだわね。マーガレ

ットはそんな優い習慣には些つとも氣をつけて呉れないと見える。それが彼の女の非常な間違だ。人間は面白い事を言はなくなつた時には、もう面白い事を考へなくなつた時だ。だがほんにさ、貴方は二千磅には如何仰有しやるんですよ？二千五百磅、そうね、今の世の中では餘計あればある程結構だわね、ウキンダーミヤ、世の中つて、ほんに面白い所だつて思はない？妾は思つてよ！

（ウキンダーミヤ卿と一緒に廣場に出る）

（舞踏室に音樂の音響く）。

ウキンダーミヤ夫人。此の家にはもう居られい。今夜妾を愛して呉れる人が妾に生命のすべてを捧げだ。妾はそれを拒絶した。馬鹿な事をした。これから彼の人に妾の生命を捧げやう。彼の人に身を任せやう。彼の人の處へ行かう

！（外套を着て、扉の處へ行き、まだ歸つて來る。テーブルに向つて腰をかけ、手紙を書き、封筒に納れて、テーブルの上に置く）。アーサーには妾の心は決して解らない。此の手紙を讀んだ時、始めて解るだらう。彼の人は勝手氣儘にするだらう。妾は正當であり、且つ一番善いと思つた事をなしたのだ。結婚の桎梏を破つたのは彼の人であつて——妾ではない。妾は唯だその羈絆を破るに過ぎないのだ。（退場）

（バーカーLより登場。Rより舞踏室の方へ行く）

（イレーネ夫人登場）

イレーネ夫人。奥さんは舞踏室に居るのかい？

バーカー。奥樣には、たつた今御出かけになりました。

イレーネ夫人。出て行つた？　廣場に居ない？

バーカー。いゝえ、奥様。奥様には只今家を御出になりました

イレーネ夫人。（立ち上つて、さも當惑したらしい表情てバーカを見る）家を出たつて？

バーカー。はい、左様で御座います奥様――奥様はテーブルの上に御主人に當てた、手紙が置いてあると仰有しやられました。

イレーネ夫人。御主人に手紙を？

バーカー。左様で御座います。

イレーネ夫人。有難う

（バーカー退場。舞踏室の音樂喝む）

自分の家を出て了つた！　夫に手紙を書いた！（抽出の處へ行つて手紙を探し、取り上げたが、恐れ戦いて再びそれを置く）。いゝや、出來るものではない！　人生はそ

んな悲劇を繰り返しはしない！　おゝ、何故此の恐しい思が、妾の頭に浮んで來るだろう？何故妾がほんに忘れやうと思つてる妾の生涯の中のあの瞬間が思ひ出されるのだらう？　人世はその悲劇を繰り返すのか？（封筒を破いて、手紙を讀んだが、憂しげな表情で、椅子の中にうづくまつて了ふ）まあ、なんて恐しい！　二十年前に妾が彼の女のお父さんに書いた手紙と、同じ文句だ！そして妾はそれが爲めどんなに辛らく責めれてゐだらう！　いゝや、妾の懲罰、妾の眞の懲罰は、今だ、今だ！（Bに坐つたまゝ）

（ウキンダーミヤ卿L、U、Eより登場）。

ウキンダーミヤ。妻に御挨拶をしましたか？（Cに來る）。

イレーネ夫人。（手紙を握り潰して）え。

ウキンダーミャ。何處に居ますか？

イレーネ夫人。大變疲れてゐますので御寢になつたの。頭痛がするつて言つて居ましたよ。

ウキンダーミャ。では、行つて見なければなるまい。行つても宜いですか？

イレーネ夫人。いえ、いえ。大した事ではないのですよ。たゞ大變疲れたの、それ丈よ。それに食堂にはまたお客さんがお出でですよ。ですから、貴方が代つて御取持をして下さいと申しましたの。くしゃ〳〵されるのが厭だと申しましたよ。（手紙を落す）貴方に言つて呉れと言いましたの！

ウキンダーミャ。（手紙を拾ひ上げる）何か落しましたよ。

イレーネ夫人。そう、有難う、それは妾の。（手を出して取らうとする）。

ウキンダーミャ。（尙手紙を見て居ながら）、だが、これは私の妻が書いたのです、じやないですか？

イレーネ夫人。（手早く手紙を取り）そう、それは——御手紙。馬車を呼んで下さる？

ウキンダーミャ。え。（上に行き、退場）。

イレーネ夫人。有難い！ 如何したもんだらう？ 如何したものだらう？ これまで感じた事のない感情が湧いて來た、如何した譯だらう？。娘は母親の眞似をしちやならない——それは恐しい事だ。如何したら彼の女を救ふことが出來るだらう？ 如何したら彼の女を救ふことが出來るだらう？ 一瞬間の中に一人の人間が破滅するのだ。それを誰か妾より良く判つてゐるものか？ ウキンダーミャを外に出なければならない、それが何より必要なのだ。

（Lに行く）だが、妾はそれを如何したら宜いだらう？　如何にかならなければなるまい。お、

（アウガスダスR、U、Eより登場、花束を持つて）

アウガスタス。あなた。私は此の通り持つてゐますよ！　私の御願を聽いて呉れないでせうかね？

イレーネ夫人。アウガスタスさん。聽えて頂戴よ。ウキンダーミャ卿を早速に貴方の倶樂部に連れて行つて頂戴。そして出來る丈永く止めて置いて頂戴。解つて？

アウガスタス。だが、貴女は私に早い時間にと言いましたね！

イレーネ夫人。（神經的に）約束通りにします。約束通りに。

アウガスタス。それから私の報酬は⁉

イレーネ夫人。貴方の報酬？　貴方の報酬？　まあ、それは明日にして頂戴。だが、今夜は、ウキンダーミャを見逃しちやいけませんよ。見逃さうものなら決して勘辨は出來ないし。二度と再び口は利きませんし。貴方とは何もしますまいよ。ウキンダーミャを貴方の倶樂部に引留める事を忘れずにね、今夜、歸へさしてはいけませんよ。

（Lより退場）

アウガスタス。さあ、僕はもう彼の女の夫かも知れない。ほんに夫かも知れない。（狼狽の姿で、イレーネ夫人の後に從ふ）

——幕——

第三幕

舞臺

ダーリントン卿の居室。暖爐Rの前には大きなソファがあり。舞臺の後手のカーテンは窟を横に曳かれ、扉L、同じくR、文書臺附のテーブルR、呼水管、硝子器、其他タンタラス式の諸道具附のテーブルC。卷煙草、紙卷煙草のあるテーブルL。洋燈(ランプ)が照り輝いてゐる。

ウキンダーミヤ夫人。(暖爐の側に立ち乍ら)何故彼の方はいらつしやらないのだらう？ 待つてゐるのが恐しい。此處にゐらつしやる筈なのに。情熱のある言葉で妾の心の中を燃燒する爲めに、何故此處にゐらつしやらないのだらうか？ 妾は冷めたい——戀のなき人のやうに冷めたい。アーサーは、今頃は手紙を讀んだに相違ない。彼の人が妾を思つて下さる人なら、私の後を追ふた

に違ひない、妾を無理に戻らしたに違ひない。だが彼の人は思つては呉れないのだ。彼の女のために捕虜にされて了つた——彼の女に迷された——彼の女に自由にされて了つた。女が男を引き留めるには、唯だ男の弱點に突き込むばかりだ。妾達は男を神のやうに崇拜すれば、男は妾達を見捨て了ふのだ他の女達が男を動物扱にすれば、彼等は媚びて、忠實になるのだ。世間は、なんて怕しいものだろう！……おゝ！此處へ來たのは氣が狂つて居たのだ、恐しい狂者だ。愛して呉れる男の自由になるか、また汚れた家庭の男の妻になるか、何方が惡るいのだろう？　どの女が知つてるか？　世界中のどの女が知つてゐるか？　だが彼の人は始終妾を愛して下さるでせうか？　妾の生命を捧げやうとしてる彼人が。妾は彼の人に何を齎らして來たゝろう？　歡びの

象徴を失つた唇、涙に盲いた眼、冷めたく震へる手、氷のやうに冷かな心だ。妾は何も持つては來ない。妾は歸らなければならない——いゝや妾は歸れない、妾の手紙が人達に判つた——アーサーは妾を歸しやしまい！　彼の命懸けの手紙がーいゝや！ダーリントン卿は明日英國を去る。妾も隨いて行かう——構はずに行かう。（些つとの間座つたが、又立ち上つて外套を着る）いや、いや！妾は歸つて、アーサーと一所に樂んでも見よう。妾は此處に待つては居られない。此處へ來るなんて、狂者だつたのだ。妾は早速歸らなければならない。ダーリントン卿は——おゝ！彼の人は此處に居る！　如何したら宜いだらう？　何んと言つたら宜いだろう？　妾を早速と追い出して了ふ氣だろうか？男は殘酷なものと聞えて居る、恐しい……おゝ！　（手で顏を蔽ふ）

（イレーネ夫人上より登場）

イレーネ夫人。ウキンダーミヤさん！（ウキンダーミヤ夫人立ち上つて見上げたが、輕蔑してすくむ）有難い、恰度好い時に來た。貴女は、貴女の夫の家に早速歸らなければなりません。

ウキンダーミヤ夫人。ならないつて？

イレーネ夫人。（命令的に）そうです、貴女は歸らなければなりません！　さ、さ、恰度好い時です。ダーリントン卿が何時歸つて來るかも知れません。

ウキンダーミヤ人。妾に近づいてはいけません！

イレーネ夫人。まあ、貴女は破滅の崖に立つて居ます、貴女は恐しい絶壁の崖に立つて居ります。貴女は、此處を早速去らなければなりません、妾の馬車

は往來の隅に待つて居ます。妾と一所に、眞直に、貴女のに家に乘つて行かなければなりません。（ウキンダーミヤ夫人は外套を脱ぎ、ソファの上に捨てる）貴女は何をして居ますか？

ウキンダーミヤ夫人。イレーネさん——貴女が此處へお出でてなかつたなら或は歸つたかも知れません。然し、貴女と此處で逢つたからには、どんなことがあつたつて、ウキンダーミヤと同じ屋根の下に住む譯にはいきません。貴女は妾に恐怖心に抱かせました、斯うまで殘忍な憤怒心を起させたのは貴女より外にはないです、貴女が何故此處へ來たのかも判つて居ます。妾の夫が妾を誘引き出す爲めに、貴女を來さしたのです、貴女と彼の人との間にどんな關係があろうとも妾は唯だ盲人のやうに仕へねばならなくする爲めに。

イレーネ夫人。まあ、そんな事を考へなさるな——考へじやいけません。

ウキンダーミヤ夫人。妾の夫の許へ御歸りなさい、イレーネさん。彼の人は貴女のものであつて妾のものではありません。彼の人は誹謗を恐れてゐるでせう。男はそんなに臆病なものです。男の人は世の凡ゆる法律を犯し乍ら、世間の口を恐れてゐます。でも彼の人は上手にやつて來ました。彼の人は嘲笑されねばなりますまい。彼の人は幾年間かロンドンにあつた最も惡い嘲笑を受けねばなりますまい。彼の人はどの惡德新聞にも自分の名前を見るでせうし妾のはどの恐しい貼札にも見られるでせう。

イレーネ夫人。いや——いや——！

ウキンダーミヤ夫人。そうよ！　彼の人は見るでせう。若し彼の人自身が來た

つたなら、妾は貴女と、彼の人とが妾の爲めに準備して呉れた淺間しい生活に歸つたでせう——妾は行きかけてゐました——然し彼の人自身は家にゐて貴女を使者(つかい)によこしました——まあ！それは不埒な——不埒な事でした。

イレーネ夫人。(C) ウキンダーミヤさん、貴女は妾を取り違ひてゐます恐しく——貴女は貴女の夫をも恐しく取り違ひてゐます。彼の人は貴女が此處に居るとは存じてゐません——彼の人は貴女は全く家に居るものと思つてゐます。貴女は御自分の家で寢てゐるものと思つてゐます。彼の人は貴女の狂者(きちがひ)じみた手紙を決して讀みません！

ウキンダーミヤ夫人。(R) 決して讀まない！

イレーネ夫人。いゝえ——彼の人は些つとも存じてゐません。

ウキンダーミヤ夫人。隨分妾を甘く見てゐらつしやるよ（イレーネの方へ行き）貴女は妾を欺いてゐますよ！

イレーネ夫人。（自分で制し乍ら）そうはしません。妾は眞實の事を話してゐるんですよ。

ウキンダーミヤ夫人。夫が妾の手紙を見ないなら、どうして貴女が此處へ來られませう？　貴女が厚顏しくも入つて來た其の家を妾は出て了つたとは、誰が話しましたか？　妾の行つた先を誰が話しましたか？　妾の夫が貴女に話して、妾を誘引（おびき）出しによこしたのです。（Lに行く）

イレーネ夫人。（R、C）貴女の夫は貴女の手紙を決して見ません。妾が――それを見たのです、妾が――それを披いたのです。妾が――それを讀むだのです。

ウキンダーミヤ夫人。（イレーネ夫人の方へ向いて）貴女が、夫に當てた妾の手紙を披いたのですつて？　大膽に、眞逆か！

イレーネ夫人。大膽に！　えゝ！　墮落し行く淵から貴女を救ふ爲めには、妾は何事でも大膽にやらないものはありません。茲にその手紙が御座います。貴女の夫は斷じてそれを讀みません。彼の人は斷じてそれを讀みません。（暖爐の傍に行つて）こんなものを書くんじやなかつたのです。（破いて火中に投ずる）

ウキンダーミヤ夫人。（驚と態度とに極めて深い輕蔑の表情を見せ）その手紙がどうして妾の手紙なものですか？　貴女は、妾を極めて平凡な手段で欺瞞（だま）せれるものと思つてゐるんです！

イレーネ夫人。まあ！　どうして貴女は、妾の言ふ事を信じないのですか？

貴女を怕しい間違の結果から救ひ出す爲め、まだ貴女を全くの破滅から救ひ出す爲めの外、何んの目的があつて妾が此處へ來たと思ひますか？　今燃へて居る手紙、それが貴女の書いた手紙です。妾は神の御聖言によつて、それを貴女に誓ひます！

ウキンダーミャ夫人。（靜かに）妾がその手紙を調べても見ない中に、燃して了うとは隨分御注意が深い。妾は貴女を信ずることが出來ません。貴女の、すべての生活は、悉く邪です、どうして貴女は眞實な事を話せませうか？（坐る）。

イレーネ夫人。（遽しく）。妾の事は、どうにでも貴女の好きなやうに御考へなさい――御勝手に仰有しやい。然し御歸りになさい、貴女の愛する夫の處へ御

歸りになさい。

ウキンダーミャ夫人。（不愉快らしく）。妾は、彼の人を愛しません！

イレーネ夫人。貴女も愛し、まだ彼の人も貴女を愛してゐます。

ウキンダーミャ夫人。彼の人は、愛とは、どんなものか御解りになりません。貴女が御解りになる程しか解つてゐません――ですが、妾は、貴女が何を求めでゐますかを知つてゐます。妾を歸へさせるといふ事は、貴女に非常な利益な事なんでせう。おゝ、神樣！妾の身の上はどうなる事で御座いませう！夫婦の仲に入り込んで來た慈悲（なさけ）も、憐憫（あはれみ）もない、見るさい耻しい、知るさへ穢しい、下劣な女の自由になつて生きるでせうか！

イレーネ夫人。（絶望の表情にて）。ウキンダーミャさん、ウキンダーミャさん、そ

んな恐しい事を仰有しやいましな。どんなに恐しいか、どんなに恐しいか、どんなに非道いか御判りになりますまい。御聽きなさい、きつと御聽きなさい！　唯だ、貴女の夫の許へ御歸りになさい、して貴女は、彼の人と如何なる口實の下にも決して打ち解けない事――決して見ない事――貴女の生活と、彼の人の生活とは決して相關しない事を御約束なさい。妾に吳れたお金は、愛を通して吳れたのではなく、憎惡(にくしみ)を通して吳れたのです、尊敬の意味ではなく、輕蔑の意味で吳れたのです。それから妾が、彼の人に對して持つてゐる權威は――

ウキンダーミャ夫人。（立ち上り）。まあ！　貴女は、それを認めてゐますの！

イレーネ夫人。そうです、してそれがどんな譯かを御話しいたしませう。それ

は貴女に對する彼の人の愛なのです、ウキンダーミャさん。

ウキンダーミャ夫人。それを妾が信じると御思ひですか？

イレーネ夫人。貴女は信じなければなりません。實際です。彼の人がそうしたのはつまり貴女に對する彼の人の愛なのです――さあ！　暴虐だとも、脅迫だとも貴女の好きなやうに仰有つしやい。然しそれは貴女に對する彼の人の愛なのです、貴女に耻をかゝせまいとしたのが彼の人の望だつたのです――耻辱、そうです、耻辱と不名譽をです。

ウキンダーミャ夫人。貴女は何を仰有つてるんです？　貴女は無禮です！　貴女と妾とは何の關係がありますか？

イレーネ夫人。（謙遜しく）何もありません。それは判つてゐます――ですが、妾

は、貴女の夫は貴女を愛してゐるといふ事を申し上げます――あのやうな愛には貴女は生涯再び觸れますまい――斷じて觸れますまい――若し貴女はその愛を捨てるなら貴女は愛に飢え、また愛は二度と貴女に與へられない時が來るでせう。愛を求めて却て拒絶される時が來るでせう――お丶！　アーサーは貴女を愛します！

ウキンダーミヤ夫人。アーサーが？　して彼の人と貴女との間に何もないと言つて呉れますか？

イレーネ夫人。ウキンダーミヤさん、神の御前では貴女の夫は貴女に對するあらゆる罪惡が悉く無辜であるのです。それから――妾は貴女の頭に描いてゐなさる、そんな不思議な嫉妬は妾の身に全く覺のない事だといふ事を申し上げ

て置きます。妾は貴女の生活と、若しくは貴女の夫の生活に近つくよりは、寧ろ死んで了います――お丶！　死にます、喜んで死にます！（ソファRへ行く）。

ウキンダーミヤ夫人。貴女は愛情を持つてゐるかのかうに話します、貴女のやうな女には愛情といふものがありません。貴女には愛情がありません、貴女は買はれたり、賣られたりする方です（L、Cに座る）。

イレーネ夫人。（惱しげなる表情にて立ち上り、自ら制し乍らウキンダーミヤ夫人の座つてゐる處へ來る、話し出すと、ウキンダーミヤ夫人の方へ自分の手を出したが敢て夫人に觸れやうともしない）貴女の好き勝手に御信じなさい。妾は些つとも悲しくはありません。ですが、貴女の美しい若い生涯を妾の爲めに御汚かしになさるな！　早速、此家を去ならければ貴女の身の上はどうなる事か御判りになりますまい、陷穽に墮さ

れ、もはや捨てられたるものとして馬鹿にされ、嘲笑され、見放され、輕蔑されたる時はどんなものか判りますまい。面と向つてドーアは閉められ、自分の顔から假面を剝がされやしないかと絶えず恐れて居、恐ろしい日蔭の道を匍匐(はいは)らねばならず、絶えず笑を聞き、怕しい世間の笑を。世間が嘗て注いたあらゆる涙の事實よりももつと悲劇的な事實です。貴女はそれはどんなものか御存知ありますまい。人間は自分自らの罪に酬へ、再びまた酬へ、そうして人間のあらゆる生活は、自らに依つて酬へられます。貴女はそれを決して知つてはなりません。——妾も、若し苦痛が贖れるなら、そこで此の瞬間に妾のあらゆる過失といふものはどんなものであろうとも、悉く贖はれ得べき筈のものです。今夜、貴女は愛情を有たない人に愛情を與へました——それ

を與へそれを破りました、ですがそんな事はどうでも宜う御座んす。妾は、妾自身の生涯を臺なしにしたかも知れません、然し貴女の生涯を臺なしにしやうとはしないつもりです。貴女は——何故か、貴女はほんの娘つ子です、捨てられるかも知れません、貴女は一人の女を舊に歸させる程の力を持つてゐません。貴女には智慧も、勇氣もありません。貴女は不名譽には堪えられますまい！　えゝ！　御歸りなさい。ウキンダーミヤさん、貴女を愛して呉れ、貴女が愛する夫の許へ御歸りなさい。貴女には子供があります、ウキンダーミヤさん。今頃は屹度泣いたり、笑つたり、或はお母さん、お母さんと呼んでゐるかも知れません、その子供の許へ御歸りなさい、(ウキンダーミヤ夫人立ち上る)神樣は、貴女にその子供を授けて呉れました。子供は、貴女が監督

してゐる子供の生涯を一層美しいものにして呉れるやうにと貴女に願つてゐます、若し貴女の爲めに子供の生涯が破滅することになつたら、貴女は神樣に何の申譯がありますか？　貴女の家へ御歸りなさい！　ウキンダーミヤさん！　貴女の夫は貴女を愛してゐます！　彼の人はたとへ一瞬間たりとも貴女を愛する事を忘れてはゐません。まだ彼の人がたとへば千人の戀人があつたからとて、貴女は、子供と一所にゐなければなりますまい。貴女に辛らく當つたとしても、貴女は子供と一所にゐなければなりますまい。貴女が非道い扱いをされたからとて、貴女は子供と一所にゐなければなりますまい。貴女を見捨てたからとて、貴女の場所は、貴女の子供のと一所なのです。（ウキンダーミヤ夫人は涙を流し、掌で顏を蔽ふて了ふ）（ウキンダーミヤ夫人の傍に突き寄つて）ウキン

ダーミヤさん！

ウキンダーミヤ夫人。（子供がするやうに、他愛なげに、イレーネ夫人に自分の手を出し乍ら）歸へさして下さい。歸へさして下さい。

イレーネ夫人。（夫人を抱かうとしたが、まだ自ら制し、顏には不思議なる笑を浮ばせ）貴女の外套は何處にあります？　（ソファから持つて來て）此處にあります。御召しなさい。早速御出でなさい！

（二人は扉に行く）

ウキンダーミヤ夫人。停つて下さい！　聲が聞えませんか？

イレーネ夫人。いゝえ、いゝえ！　誰もゐませんよ！

ウキンダーミヤ夫人。え、居ます！　御聽きなさい！　まあ！　夫の聲です！

彼の人が來るのです！　助けて！　まあ、策略です！　貴女が迎にやつたのです。

（戸外の聲）

イレーネ夫人。御默りッ！　妾は出來る事なら、貴女を救いに此處へ來たのです。然し、殘念ながら餘り遲い！　彼處！（カーテンのかゝつた窓を指す）貴女の最初の機會は逸した、貴女が機會を得たのでしたなら！

ウキンダーミャ夫人。ですが貴女は？

イレーネ夫人。まあ！　妾はどうでも宜いのです。妾は皆さんに逢ひます。

（ウキンダーミャ夫人はカーテンの影に自分の體を隱す）

アウガスタス。（外で）何んだい、ウキンダーミャ君、後にしちやいかんよ！

イレーネ夫人。アウガスタスさん。隱れたのは妾よ！

（些つとの間躊躇したが、周圍を見廻して、扉Rを見、それより退場する）

（ダーリントン卿、ダムビイ、ウキンダーミャ卿、アウガスタス　ロートン卿。セシル　グラハム登場）

ダムビイ。彼奴等が、今時分僕達を倶樂部から追ひ出すなんて隨分邪魔臭い奴等だ！　まだ漸つと二時だ。（椅子に坐つて）元氣のある夜遊び仲間なら、今頃やつと始つた頃だ、（欠呻をして、やがて眼を閉じる）

ウキンダーミャ。御親切に、ダーリントンさん、アウガスタスさんの云ふ通り貴方の宅に會を開いて下さつて。ですが私は濟まないがゆつくり居られませ

ん。

ダーリントン。眞實に！　困つたですね！　卷煙草を如何です、御嫌ですか？

ウキンダーミヤ。有難う！（坐る）

アウガスタス。（ウキンダーミヤに）おい、行つちやいけないせ。話す事が澤山あるんだ。大切な事や、色んな事や（ウキンダーミヤと一所にLに坐る）。

セシル　グラハム。まあ！　どんな事か皆んな解つてゐるさ！　タッピーさん

イレーネ夫人の外は、一切喋舌つちやいけませんせ。

ウキンダーミヤ。さあ、そんな事は君の仕事じやあるまいよ、さうじやないか？セシル君。

セシル　グラハム。ないさ！　それが僕には面白い譯なのだ。僕自身の仕事は

死んで了い度い程倦怠されるのだ。僕は他人の仕事が好きだ。

ダーリントン。何か飲みますか、諸君。セシル君、ウキスキーと、ソーダ水を飲まないかね？

セシル　グラハム。有難う。（ダーリントンとテーブルへ行く）。イレーネ夫人は、今夜は大變綺麗に見えだね、そうじやなかつたかね？

ダーリントン。僕は、彼の女の崇拜者の一人じやないよ。

セシル　グラハム。僕も、嘗てはそうじやなかつたが、今はそうだ。何故！彼の女は僕の伯母のカロリンに強ひて紹介さしだのよ。彼の女は屹度伯母さん處の小晝飯に行くんだよ。

ダーリントン（驚いて）いゝッ？

セシル　グラハム。實際、行くよ。

ダーリントン。失敬します、諸君。僕は、明日出發んで。手紙を二三本書くのですから（手紙を書くテーブルに行つて坐る）。

ダムビイ。賢明なるイレーネ夫人。

セシル　グラハム。おい、ダムビイ！　君は寢てると思つてゐたよ。

ダムビイ。僕は、依然として僕だ。

アウガスタス。賢明なる婦人は、私はなんて、ぐだらない馬鹿者だかを善く知つてゐる——私自身が知つてゐるやうに知つてゐるよ。

（セシルグラハムは笑ひながらやつて來る）

まあ、君は笑ふかも知れんが、男を善く理解してゐる婦人が來るのは重大な

事だよ。

ダムビイ。それが恐しい危險な事ですよ。彼等は大抵男と結婚すれば最後さ。

セシル　グラハム。だが、僕は思ひますがね、貴方は二度と再び決して彼の女と逢はないでせうね！　そう！　貴方は昨日の晩倶樂部で話したじやないのですか。貴方は例の事を知つてゐると話しましたよ——。

（彼に私語き乍ら）。

アウガスタス。さあ、彼の女がそれを話したよ。

セシル　グラハム。それからワイスバテン事件は？

ダムビイ。それから彼の女の收入は？　それを彼の女が話したですか？。

アウガスタス。（極めて眞自目な聲で）彼の女が明日その事を話すことになつてゐる

んだ。

（セシルグラハムはテーブルCに行く）

ダムビイ。恐しく商賣的だ、今頃の女達は。吾々の祖母さん達は、男に惚れる事は惚れたが、實際、君、其孫娘に當る現代の女は金になる男にばかり惚れるよ。

アウガスタス。君は彼の女を惡い女にしたいのかい。彼の女はそうじやないよ！

セシル　グラハム。まあ！惡い女は人を困らせ。善い女は人を倦怠させる。彼等はたゞそれ丈の違ひさ。

アウガスタス。（煙草を喫かし乍ら）イレーネ夫人には一つの未來があるよ。

ダムビイ。イレーネ夫人は一つの過去を持つてゐますよ。

アウガスタス。過去を持つ女が好きさ。彼等は始終それを話しちやくだらなく

嬉しがつてゐるよ。

セシル　グラハム。さあ、貴方は、彼の女と話す事が澤山あるんでせう、タッピイさん（立ち上つて彼の方へ行く）。

アウガスタス。君は煩悶してゐるね、君、君はくだらない煩悶してゐるね。

セシル　グラハム。（肩に手を入れ）おや、貴方は姿を失つてゐますよ、まだ人格も失つてゐますよ。だが調子を失はんやうにしなさい。貴方は一つきりしか持たないのですから。

アウガスタス。君、私がロンドン中で一番善い性質の人間でながつたなら——

セシル　グラハム。僕達は、もつと尊敬して交際つたかも知れません、僕達の事はそうして呉れないのですか？　タッピイさん、（フラ〳〵と歩いて）。

ダムビイ。現代の青年は全く不思議だ。彼等は白髪頭を絶對に尊敬しない。（アウガスタス卿は怒つて四邊を見渡す）

セシル　グラハム、イレーネ夫人はタッビイさんを大變尊敬してゐるよ。

ダムビイ。そこで、イレーネ夫人は彼の女の性來の安息に、もつたいない例を示したのだ。現代の大抵の女が、自分達の夫以外の男にする全く殘忍な手段だ。

ウキンダーミヤ。ダムビイ君、君は意地が惡い。それからセシル君、君はその舌をなくしてしまい。イレーネ夫人の事は默つて置き給い。君はイレーネ夫人の眞實の事を知つてゐない癖に、始終彼の女の惡口ばかり言つてゐる。

セシル　グラハム。（L、Cなる彼の方へ來て）アーサー君、僕は決して惡口は言はん

よ。僕は唯だ饒舌をしてゐる丈だ。

ウキンダーミヤ。惡口と、饒舌とにどんな違ひがあるのかい？

セシル　グラハム。さあ！　饒舌は面白いよ！　歴史なんてほんの饒舌さ。だが惡口なんて饒舌を道德でくだらなくしたものだ。そう、僕は決して道德化しない。道德化した男は常に僞善者だ。道德化した女は常に平凡だ。天下に背德者としての女に不適當なものは何もない。それから大抵の女はそれを承知でゐる　僕は喜んで言ふよ。

アウガスタス。佳く言つた、君は、佳く言つたよ。

セシル　グラハム。濟みませんでしたね、人が默つてゐると僕は何時でも無禮な事をするやうです。

アウガスタス。君、私が君達の年輩だつた時分——

セシル　グラハム。だが貴方はそんなではなかつたでせう、タッピイさんまたそんな事は嫌でせうー。（Cを立つ）。ダーリントン君骨牌をしないか、君もやるだろう、アーサー君、やらない？

ウキンダーミヤ。いや、有難う、セシル。

ダムビイ。（嘆息なついて）神様！結婚はどうして男を破滅させるでせう！　結婚は煙草の如く精神を頽廢せしめ、煙草よりも遙かに贅澤なものだ。

セシル　グラハム。勿論、貴方もやるでせうね？　タッピイさん。

アウガスタス。（自分でテーブルてブランデーとソーダを注ぎ乍ら）、出來ないよ、君、イーネ夫人ともう決して遊んだり、飲んだりしない事に約束したのだ。

セシル　グラハム。さあ、タッピイさん、道德の路に迷ひ込まないやうにしなさい。繰り返へして言へますがね、貴方は全く倦怠してますよ。そんな事は女の非度い欠點ですからね。彼等は始終男には善良なれと要求してゐる、そして若し僕達が善良だつたなら彼等は僕達に逢つても決して惚れやしない。彼等は、僕達の全く回復のつかない惡い方を見たがつて、そして何等注目を惹かない善を殘すのです。

ダーリントン。（手紙を書いてゐた卓を立ち上り）。彼等は吾々を始終惡人と見てゐる！

ダムビイ。僕は、僕達が惡人だとは思はんよ。タッピーさんの外は凡て善人だと思つてゐる。

ダーリントン。いや皆んな泥溝に入つてはゐるものゝ、然し或るものは天の星

を見てゐるよ。（Cテーブルに坐る）。

ダムビイ。吾々は皆んな泥溝に入つてゐるものゝ或ものは天の星を見てるつて？僕に言はせると、君は今夜は非常にローマンチックだよ、ダーリントン君。

セシル　グラハム。餘りローマンチック過ぎるよ！　君は戀をしてゐるに相違ない。誰かい？　女は。

ダーリントン。僕の戀してゐる女は自由ではない。また彼の女はそうではないと思はれる。（話してゐる間、皆の目は自然とウキンダーミヤを盡視めてゐる）。

セシル　グラハム。そこで、結婚した女かね！結婚した女が夫に盡す親切さは此の世にまだとないものだせ。結婚した男でそれを解つてるものはないんだ。

ダーリントン。さあ！彼の女は僕を愛しはしないよ。彼の女は善良なる婦人だ

僕が是れまでに出逢つたの中での！　ほんの善良なる婦人だ。

セシル　グラハム。是れまで出逢つた中での善良なる婦人だつて？

ダーリントン。そうだ！

セシル　グラハム。（紙巻煙草に火をつけ乍ら）。さあ、君は果報者だ！何故つて僕は何百人といふ善良なる婦人に出逢つた、善良なる婦人の外に出逢つたとはない世の中は善良なる婦人に充されてる、善良なる婦人を知るのは中等教育だ。

ダーリントン。あの女は純潔で、潔白だ。あの女は吾々男子が失つたすべてのものを持つてゐる。

セシル　グラハム。君、一体吾々男子には純潔と、潔白が何になるんだ？　よく考へると釦孔の方が遙かに効驗（きめ）があるものだ。

ダムビイ。そこで、彼の女は實際君を愛さんのかね？

ダーリントン。いや、愛しはしないさ！

ダムビイ、萬歳だ、君は。此の世の中にたゝ二つの悲劇がある。一は吾人の求むるものが得られない事で、他の一はそれを得たる事だ、後者は最も惡いもので、眞の悲劇だ。然し彼の女が君を愛さないとは面白いことだ。君は、君を愛さない婦人を何時まで愛する事が出來るかね？　セシル君。

セシル　グラハム。吾輩に惚れない女をかね？　さあ、吾輩の一生涯中さ！

ダムビイ。僕も出來るさ、だが出逢すのが却々困難だよ。

ダーリントン。どうして君はそう自惚れる事が出來るのかね？　ダムビイ君。

ダムビイ。僕は自惚の事柄として言ふのではない、殘悔の事柄として言ふのだ。

僕は是れまで動物的に、狂的に崇拜して來た。悲しい哉、それが莫伽に厄介なものだつたのだ。時折、些つとの間位はそれがないと好いのだがね。

アウガスタス。（四邊を見廻して）「時」は君自身を敎育させると思ふがね。

ダムビイ。なんの、「時」は却つて僕の學んだすべてを忘れさせる。それが何よりも大切なのでよ、タッビイさん（アウガスタスは不安の體で椅子を動く）。

ダーリントン。君達はなんて皮肉なんだね！

セシル　グラハム。皮肉とは何かい？（ソファの背後に坐り）。

ダーリントン。すべてのものゝ相場を知つてゐる男は、何物の價値も知らない。

セシル　グラハム、それからダーリントン君、センチメンタルな人間はすべてのものに於ける不合理な價値を見る人間であつて、別々になつたものゝ相場

を知らない人間だ。

ダーリントン。君は何時も面白いね、セシル君、恰も經驗家であるかのやうに話すね。

セシル　グラハム。僕はそうだ、（暖爐の前に行く）。

ダーリントン。君は、まだ遙つと若いよ！

セシル　グラハム。とんでもない間違だ。經驗は人生に就ての當然の問題だ。僕は經驗を持つてゐる。タッビイさんにはない。經驗とはタッビイさんが自分の過失に與へた名稱だ。唯だそれだけだ。（アウガスタスは怒つたやうに周圍を見廻す）。

ダムビイ。經驗とは誰でも自分の過失に與へた名稱だ。

セシル　グラハム。（暖爐の傍のダムビイの後に立ち）。人間はどんな過失を犯してもな

らない。（ウキンダーミヤ夫人の扉を見る）。

ダムビイ。それがないなら、人生は極めてくだらないものだ。

セシル　グラハム。勿論、君は、君と相愛の仲なる彼の女には全く忠實であるに相違ないね、ダーリントン君、彼の女に？

ダーリントン。セシル君、若し男が一人の女を愛するとすれば、世界中の他の女はその男には絶對に無意味だ。戀愛は男を變化させる——僕は變化されだ。

セシル　グラハム。まあ！何んて面白いのだ！タッビイさん。僕は貴方に話し度いのです。（アウガスタスは知らぬ振りする）。

ダムビイ。タッビイさんに話すのは無用だ、恰度煉瓦の壁に話すと同じ事だ

セシル　グラハム。だが、僕は煉瓦の壁と話すのが好きだ――それが世界中で僕を決して反駁しない唯一のものだ！　タッビイさん！

アウガスタス。おい、それは何んだ？（立ち上つてグラハムの方へ行く）

セシル　グラハム。此處へ御出でなさい。特別の御願です。（私かに）。ダーリントン君は戀愛の純潔に就いて話したり、戀愛を道德化したりしてゐる、またそんなやうな事を話してゐる、それから彼は此の室で、或る女を得たのですよ。

アウガスタス。いや！　眞逆！　眞逆！

セシル　グラハム。（低い聲で）。そう、此處に彼の女の扇がある。（扇を指す）

アウガスタス。（低い聲で）、おい！　おい！

ウキンダーミヤ。（扉の傍に立ち）僕は直ぐ歸へります、ダーリントンさん。貴方

が早速ロンドンを出發つのでつまらない。何卒、御歸へりになつた折には、御訪ねになつて下さい！　妻も、僕も貴方に逢ひますのが嬉しいのですから。

ダーリントン。（ウキンダーミヤと共に舞臺に立つて）、さあ、御氣の毒ですが、永い間留守にせねばならないのですから、左樣なら！

セシル　グラハム。アーサー君！

ウキンダーミヤ。何かね？

セシル　グラハム。君と些つとの間話し度い事がある、いや、來給ひ！

ウキンダーミヤ。（外套を着乍ら）。駄目だ――歸へるのだ！

セシル　グラハム。大事件だ、非常に面白い事件だ。

ウキンダーミヤ。（笑ひ乍ら）。また君の馬鹿話だろう、セシル君。

セシル　グラハム。そうじやない！　實際そうじやないよ！

アウガスタス。（ウキンダーミヤの方へ行きながら）、おい君、まだ歸へつちやいかんよ君に話し度い事が澤山あるんだ。それからセシルは君に何か見せるものがあるよ。

ウキンダーミヤ。（忙いて歩いて）。おい、それは何かい？

セシル　グラハム。ダーリントンは此室で、一人の女を得たのだ。此處にその女の扇がある。面白いじやないか？（間）。

ウキンダーミヤ。善なる神よ！（扇を攫む――ダムビイ立ち上る）。

セシル　グラハム。何事だい？

ウキンダーミヤ。ダーリントン卿！

ダーリントン。（見返つて）。え！

ウキンダーミヤ。僕の妻の扇が此處にあるとはどうした譯ですか？　離せ、セシル。觸らしちやいかん。

ダーリントン。君の細君の扇が？

ウキンダーミヤ。そうです、此處にあるのです！

ダーリントン。（ウキンダーミヤの方へ來る）、僕には判らない！

ウキンダーミヤ。貴方は判つてゐるに相違ありません。說明を聽き度いものです、僕に渡しちやいかん、馬鹿　（セシル　グラハムに）。

ダーリントン。（私かに）、つまり彼の女が此處に居ただけさ！

ウキンダーミヤ。御話しなさい！　妻の扇が何故此處にあるのですか？　御答

して下さい！　神に誓つて！　僕は貴方の居間を探します、そして僕の妻が居ましたなら、僕は――（動く）。

ダーリントン。君は、僕の室を探しちやいかん。君にはそんな事をする權利がない。僕は許さない！

ウキンダーミヤ。惡漢（わるもの）め。！　隅から隅まで探さん中は、僕は君の室を去らん！

そのカーテンの後で動いてゐるのは何んですか？

（カーテンの方へづか〳〵行く）。

イレーネ夫人。（Rの後へ來る）。ウキンダーミヤさん。

ウキンダーミヤ。イレーネさん

（皆な悉く立ち上つて、見返へる。ウキンダーミヤ夫人はカー

テンの後よりすつと出でLよりこつそりと出て了ふ）

イレーネ夫人。どうも濟みませんでした、今夜貴方の家を出る時分に、貴方の奥さんのを妾との間違ひて持つて來たのです。眞實に濟みません。（セシルから扉を取る。ウキンダーミヤは輕蔑の態度でイレーネ夫人を疑視め、ダーリントンは驚愕と怒氣とに充され、アウダスタスは他の方を向き變へ、他はお互に笑つてゐる）。

――幕――

第四幕

舞　臺――第一幕に同じ

ウキンダーミヤ夫人。（ソファに横はり）。如何して妾は彼の人に話せよう？彼の人へは所詮話せない。死ぬやうな思だ。妾が彼處の室を逃げて來た後で、どんな事が起つたゞろう。もしか、ひよつとすると彼の女は、妾が彼處へ行つた眞實の理由を皆んなに話して終つたかも知れない。それからあの眞實の意味を――妾の生命にも代へられる妾の扇の事を。まあ、彼の人に知れたら――二度と如何して顏を合はせられやう？彼の人は妾を決して赦しやしないだろう（ベルを鳴らす）。人は如何したら安全に考へ、安全に生きられるのだろう

——誘惑や、罪惡や、不埒な事のないやうに。さうしたなら早速——まあ！
人生は恐しいものだ。吾々をそれを支配する事はない。吾々はそれを支配する事はない。

（ロサリーRより登場）

ロサリー。奥様、御呼びて御坐いましたか？

ウキンダーミヤ夫人。旦那様は、昨夜何時頃來たつたか、お前見たかい？

ロサリー。旦那様は、五時迄には參りませんでした。

ウキンダーミヤ夫人。五時？旦那様は今朝妾を起しに來た、來ながつたかい？

ロサリー。左様で御座います奥様——九時半に。妾は、奥様には未だ御眼覺にはなられませんと申しました。

ウキンダーミヤ夫人。何んとか言つたかい？

ロサリー。奥様の扇の事で、何が申しましたが、妾には旦那様の仰有つた事は一向分りませんでした。奥様、扇が御失くなりになりましたか？妾にも見當りませんですの、それからバーカーさんも何の室にもないと言いました。彼の人は室といふ室は殘らず、また廣場も探しましたので御座います。

ウキンダーミヤ夫人。構はないよ。バーカーにも心配しないでも好いと御言へよ。

（ロサリー退場）

ウキンダーミヤ夫人。（立ち上り乍ら）。彼の女は屹度夫に話すに違ひない。妾には自分の身を犧牲にするなんて、不思議な行動をなしてゐる一人の人間が想像される。それが自然的に、無茶に、體裁よくやつてゐて——それが判ると高

價いものにつくのだ。彼の女は、彼の女の破産と妾の破産とに何故躊躇するのだろう？……隨分可怪い……妾は、彼の女を自分の室で公然で恥かしめやうと思つたが、彼の女は妾を救ふとして他人の室で、公然に恥辱を受けた……もの事には傷しいアイロニーがあるものだ、妾達が善良なる婦人と、惡い婦人の噂をする中にもアイロニーがある……まあ！　何たる教訓だ！　彼等が、妾達に必要がなくなつた時にばかり、妾達の教訓が得られるとは、人生に於ける何たる傷しさであろう！若しか彼の女が話さなかつたら妾が話さなければならない、まあ！それが恥しい、それが恥しい。それを話すといふ事はそれを通して再び生きる事だ。實行は人生に於ける最初の悲劇だ、理論は第二の悲劇だ。理論は或は最も惡いものかも知れない。理論には慈悲がない！……

……まあ！（ウキンーダミヤが入つて來ると立ち上る）。

ウキンダーミヤ。（接吻する）。アーガレツト——お前の顏は何んて蒼白いのだ！

ウキンダーミヤ夫人。大變寢苦しがつたのです。

ウキンダーミヤ。（妾と一所にソファに座り乍ら）。濟まなかつた。大變に遲く來たので、お前を起さうとはしなかつた。お前は泣いてゐるね。

ウキンダーミヤ夫人。はい、泣いてゐますの、貴方には御話しいたします事が御座いますので。アーサー。

ウキンダーミヤ。お前、お前は氣分が良くないよ。餘り苦勞が過ぎたのだ。田舍へ行かう。セルビイがお前に良いのだ。季節は大概過ぎた。留つてゐる必要はない。お前！今日行かう、お前が好いなら。（立ち上る）。三時四十分には十分間に

合ふから。フアンネンの處へ電報を打たう。(行つて、テーブルに座り電報を認める)。

ウキンダーミヤ夫人。はい、今日參りませう。いや、妾は今日參り兼ねます。妾は町を去る前に、逢なければならない方が御座いますの——妾に親切にして呉れた御方に。

ウキンダーミヤ。(立ち上り、まだソファに横へて)。お前に親切に?

ウキンダーミヤ夫人。それよりも、遙つと。(立つて夫の處へ行き)。話しますがね、あなた。誰だもう妾を愛して下さい、是まで貴方が愛して下さつたやうに愛して下さい。

ウキンダーミヤ。是れまで? お前は、昨夜此處へ來たあの穢い女を考へてはしないのかい?(ブラ〳〵歩いて、妾の座つてゐるRに座り乍ら)。もう考へるな——いや

考へちやならん。

ウキンダーミヤ夫人。いたしません。妾は惡く、まだ馬鹿で御座いました。

ウキンーミヤ。お前が、昨夜彼の女を招待したのは大變親切だつた——然しもう二度と再び決して逢つてはならん。

ウキンダーミヤ夫人。貴方は何故そんな事を仰有しやいますの? (間)。

ウキンダーミヤ。(妾の手を支へ乍ら)。マーガレット、私は、イレーネ夫人は、口で言ふ通りの非度い罪惡を犯した女だと思つてゐた。彼の女は、善良な人間になり度いのだと思つてゐた。些つとして馬鹿げた事から彼の女が失つた、以前の境遇に立ち歸へり度いのだと思つてゐた。以前の正當な生活に導かれ度いのだと思つてゐた。私は、彼の女の話して呉れた事を信じてゐた——私

は彼の女をとり違ひだ。彼の女は惡黨だ――女としては此の上もない惡黨だ。

ウキンダーミヤ夫人。あなた、あなた、何の女の事でも、そう非度く仰有しやいましな。妾は恰度人種か、若しくは人類が二つに分れたつだやうに、人間も善人と、惡人とに分けられるものとは思ひませんの、善良なる婦人と呼ばるゝ人は、恐しいものを有つてゐるかも知れません、不注意、頑固、嫉妬、罪惡と言つたやうな狂いじみた心を。一般に言はれたやうに、性惡な婦人は悲哀、殘悔、苦痛、犧牲とを有つてゐるかも知れません。それから妾はイレーネ夫人は性惡な婦人だとは思ひません――妾はそうでないと思つてゐます。

ウキンダーミヤ。お前、女は駄目だ。私達に仕向けた彼の女の害惡はどうでも好い、お前は二度と決して彼の女に逢つてはならん。彼の女は、何處でも油

斷の出來ない女だ。

ウキンダーミヤ夫人。ですが、妾は彼の女に逢ひます。彼の女に此處へ來て貰い度いのです。

ウキンダーミヤ。斷じて！

ウキンダーミヤ夫人。彼の女は、一度は貴方の客として此處へ參りました。此度は妾の客として來なければなりません。それが公平に違ひないです。

ウキンダーミヤ。彼の女を此處へは斷じて來させない。

ウキンダーミヤ夫人。（立ち上り）。もう、そんな事は遲いのです、あなた、今時分そんな事を仰有つて。（動き乍ら）。

ウキンダーミヤ。（立ち上り）。マーガレット、お前が彼の女が昨夜此の室を出た

後ち、何處へ行つたかを判つてゐたなら、お前は彼の女と一所に同じ室にゐられやしないだろう。それが眞實に耻知らずだつたのだ、――全くの。

ウキンダーミヤ夫人。あなた、妾は、もう我慢が出來ません。貴方に話さなければなりません。昨夜の――

（バーカー、ウキンダーミヤ夫人の扇と、一枚の名刺を載せた盆を持つて來る）

バーカー。イレーネ夫人が、昨夜間違ひた奥樣の扇を御返しに參りました、イレーネ夫人は御名刺に御傳言を御書きになりました。

ウキンダーミヤ夫人。まあ、イレーネ夫人は御親切にも御訪ね下さいましたね。（名刺を讀む）。何卒御入り下さいと、お言へな。（バーカー退場）

彼の女は妾に逢ひ度いのですよ、アーサー。

ウキンダーミヤ。（名刺を取つて見る）。マーガレット、逢はないで御呉れよ。何れにしても私が最初に逢ふよ。彼の女は極めて危險な女だ。私の知つてゐる處では極めて危險な女だ。お前の思ひ通りにしちやならないよ。

ウキンダーミヤ夫人。妾が彼の女に逢ふのは正當な事です。

ウキンダーミヤ。お前、お前は實に辛い立場かも知れないが。その立場に當つてはいけないよ。お前が逢ふ前に私が逢はなければならないのは實際已むを得ないのだ。

ウキンダーミヤ夫人。どうして已むを得ないのですか？

（バーカー登場）。

バーカー。イレーネ夫人。

（バーカー退場）

（イレーネ夫人登場）

イレーネ夫人。如何で御座いますか？　奥さん。（ウキンダーミヤに）。如何で御座います？　ウキンダーミヤさん。御判りでしたか、奥さん、貴女の扇には、眞實に濟みませんでしたのよ。どうして恁んな莫伽げた間違ひをしたものか、とんと判らないのですよ。とんだ莫伽でしたわね。恰度御宅の方へ向つて乘つて來たものですから、御目にかゝつた上、妾の不注意に、たんと御詫をして貴女の所有物を御返しするには、ほんに良い機會と思ひましたの、旁だ御訣別の御挨拶を申し上げ度いと思ひましたの。

ウキンダーミヤ夫人。御挨拶ですつて？（イレーネ夫人の座つてゐるソファの方へ行つて、夫人の側に座る）。貴女は御出發になるので御座いますか？　イレーネさん。

イレーネ夫人。え、妾は又外國に行つて住むのです。英國の氣候は妾には適ひませんの。妾の——心は感情的になつたので、それが妾は好きませんので。妾には何れかと言へば南國に住むのが宜しいのですよ。ロンドンは餘り霧が多いのでそれに——それに、眞面目な人間が多いので、ウキンダーミヤさん。霧が眞面目な人間を作るのか、又眞面目な人間が霧を作るのか、何方ですか妾は存知ませんが、すべてのものが、妾の神經を興奮させますの、それから今日の午後團體列車で出發つので御座います。

ウキンダーミヤ夫人。今日の午後？　妾は大變貴女に逢ひ度かつたのですよ。

イレーネ夫人。まあ、御親切に！　ですが濟みませんが、妾は行かなければな

らないのですよ。

ウキンダーミヤ夫人。もう二度と御目にかゝれませんでせうか？　イレーネさん。

イレーネ夫人。殘念ですが、御目にかゝ、ません。妾達の生活は、もう遥つと離れたのです。ですか、ほんのつまらない事ですが、貴方に御願ひがあるのですよ。それはね、妾は貴女の寫眞を一枚欲しいのですの、奥さん——一枚頂戴出來るでせうか？　妾はどんなに滿足ですか、御分りになりますまい。

ウキンダーミヤ夫人。さあ、何卒、あのテーブルの上に一枚御座いますよ。御覽に入れませうね。（テーブルの方へ行く）。

ウキンダーミヤ。（イレーネ夫人の傍に來て低い聲で話す）。貴女は、昨夜あんな行動（ふるまい）で

をし乍ら、此處へ闖入（はいり）つて來るなんて、隨分な方です。

イレーネ夫人。（面白がつて笑ひ乍ら）。ウキンダーミヤさん、眞面目腐つてゐるわね！

ウキンダーミヤ夫人。（身返りして）まあ、御愛相に——妾はそんなに美麗じやなくつてよ、（寫眞を見せ乍ら）。

イレーネ夫人。貴女は、隨分美麗よ。ですが貴女の坊つちやんと一所のは持たなくつて？

ウキンダーミヤ夫人。あつてよ、それが欲しいの？

イレーネ夫人。そうよ。

ウキンダーミヤ夫人。少々御待ち下さるなら、持つて來ますよ。二階にありま

すから。

イレーネ夫人。濟みませんね、奥さん。色々御手を煩しまして。

ウキンダーミャ夫人。(扉Rへ行き)。いゝえ、どういたしまして、イレーネさん。

イレーネ夫人。眞實に有難いわ。

(ウキンダーミャ夫人Rより退場)

貴方は、今朝は、隨分氣色が變よ。ウキンダーミャさん。どうしたんです?

マーガレットと妾とは、何れも愉快なのに。

ウキンダーミャ。私は、妻と、貴女とに一所に逢ふのが、もう我慢がしきれないのです。それに、貴女は、私に眞實の事を言はないのですから、イレーネさん。

イレーネ夫人。貴女の仰つしやるやうな眞實は、彼女にだつて言いませんよ。

ウキンダーミャ。(扉Cに立ち乍ら)。時には、話して貰ひたかつた。過ぎ去つた半年といふものは全く艱難と、苦痛と、煩悶に過ごしたのです。それよりも一層心配だつたのは、私の妻に知れやしないかといふ事が——何女が死んだものと思ひと敎へられたその母親が、彼女が死んだものと思つて泣てゐるその母親が、現在生きてゐて——一人の離緣された女が、面白い名目の下に歩き廻つて、一人の惡い女が、世の中を思ふがまゝに荒れ廻つて、現在の貴女のやうにです——それが彼女に知れやしないかと思ふのが、何よりの心配だつたのです。手形又手形、贅澤又贅澤と益々嵩むで行く貴女の色々な支拂の爲めに、以前から私は金を用意して置きました。是れまでついしたことのない昨

日のやうな夫婦喧嘩のないやうにと努めて居りました、どんな意味で私はそんな事をしたのか貴女には御判りになりますまい、御判りですか？　彼の女のスキートな唇から、苦(にが)い言葉が漏れ出づるのも、全く貴女の爲めだつたのです。私は彼女の次に貴女に御目にかゝるのは嫌で御座います。貴女は彼の女の有つてゐた無邪氣といふものを汚がしました。（L、Cを動く）。それからそんな事は皆な眞面目で、正直な貴女のほんの過失からする事だと思つてゐました。だが、貴女はそうではないのです。

イレーネ夫人。何故そんな事を仰有しやるの？

ウキンダーミヤ。貴女が、私に妻の舞踏會への招待狀を書かしたのです。

イレーネ夫人。妾の娘の舞踏會に――そうよ。

ウキンダーミヤ。貴女が御出でになりまして、それから貴女が家を御出てなつて一時間も經つか經たない中に貴女は一人の男の室に入らつしやつたのです――貴女は皆さんの前で耻しめられたのです。（Cの方へ行く）。

イレーネ夫人。そうよ。

ウキンダーミヤ。（夫人の方に返つて）。それですから、私は貴女を、貴女の性質通りに觀る權利があるのです――何んの價値もない、邪惡な女として。私は、貴女は斷じて此家に入つてはならんと、また私の妻の側に來る事は斷じてならんと、貴女に申上げて置く權利を持つてゐます――

イレーネ夫人。（冷かに）妾の娘、貴女の仰有しやるのは。

ウキンダーミヤ。貴女には、彼女(あれ)を貴女の娘と呼ぶ權利がありません。貴女は

彼女を後にして、彼女が搖藍の中にゐたほんの赤ん坊だつた頃彼女を捨てました。貴女は、反對に貴女を捨てた、貴女の戀人の爲めに彼女を捨てました。

イレーネ夫人。（立ち上り）。彼の人の信用に關して仰つしやるのですか？ウキンダーミャさん――或は妾の信用に關してですか？

ウキンダーミャ。彼の人のです、判つてゐる通り。

イレーネ夫人。御注意なさい――貴方は御注意なさつた方が善かつたのですよ。

ウキンダーミャ。私は戲談に言ふのではないのです。貴女を善く存じてゐます。

イレーネ夫人。（相手をしつかりと睨め乍ら）。妾には信じられません。

ウキンダーミャ。私は、貴女を善く存じてゐます。貴女の生涯中の二十年間といふものは、貴女は、貴女の子供を見ずに、貴女の子供を敎育せずに生きて來ました。或る日の事、貴女は娘が或る富豪の男と結婚した事を新聞で御覽になりました。貴女は、貴女の恐しい機會に出逢つたのです。貴女は、貴女のやうな女が、彼女の母親であつたのだといふ事を知らせて、公衆の面前で、彼女を耻しめやうと思つたのです、私が如何なる事にも堪え忍ぶだろうと思つたのです。貴女は、そこで獨特の脅迫を始めたのです。

イレーネ夫人。（自分の肩を振り乍ら）醜陋い言葉は御制めなさい。亂暴だわ。妾は機會に出逢つたのは事實です、それから其の機會を利用したのです。

ウキンダーミャ。そうです。貴女は其の機會を利用したのです――それを駄目

にしたのです昨夜すつかり素破抜かれて。

イレーネ夫人。（妙な笑をして）ほんにです、妾は昨夜それをすつかり駄目にしました。

ウキンダーミヤ。それから、どんでもない粗忽をして、妻の扇を持つて行つて、タ―リントン家の室に忘れるなんて、寛し難い事です。今になつてもうそれを見るに忍びません。妻には二度ともう決して使用せますまい。私にとつては外聞の悪い事です。貴女はそれを御持になつてゐて、決して返してはなりません。

イレーネ夫人。妾はそれを持つてゐやうと思ひます。（立ち上つて）ほんに佳い扇ですもの。（扇を取る）マーガレットにこれを妾に頂戴て言いませう。

ウキンダーミヤ。妻は、それを貴女に進上るでせう。

イレーネ夫人。まあ、彼女はもう文句なしに呉れると思ふわ。

ウキンダーミヤ。序でに貴女に、彼女が御祈をする前に毎晩接吻する小さな肖像畫を御進上げし度いと思ふのです――それは美しい黒髪を有つた、無邪氣に見える若い女の小さな肖像畫です。

イレーネ夫人。さあ、そうですね、思ひ出せます。どんなに若く見えるでせうね！（ソファに行つて座る）妾が結婚前にした姿です。黒い髪や、無邪氣な表情は、其頃の流行つたのです、ウキンダーミヤさん！（間）

ウキンダーミヤ。今貴女が此處へ御出でになつたのは何の意味からです？貴女の目的といふのは何です？（L、Cに行つて座り乍ら）

イレーネ夫人。（聲とは反對の表情で）無論、妾の可愛い娘に御訣別の挨拶に來たのです。（ウキンダーミヤは怒つて下唇を噛む。イレーネ夫人は彼を睨め、彼の聲と、容姿とは嚴肅になり、語調には、沈痛なる悲劇の表情が見られ。些しの間自分の體を擡げる）まあ、妾が、彼女に悲しい舞臺を見せたり、彼女の首に俛れて泣いたり、彼女に妾が誰であるかを話したり、またそんなやうな事をしやうとしてゐると想像なさるな。妾は母親の一幕を演ずる野心はありません。妾は生涯中たつた一度母親の愛情を知りました。それは昨夜の事でした。眞實に恐しく——妾を感じさせたのです——非度く感じさせたのです。貴方の仰つしやる通り、二十年の間といふものは、妾は子供がなくて生きてゐました、——今でも子供を持たずに生き度いのです。（自らの感情を、平凡な笑で隱し乍ら）それから、ウキンダーミヤ

さん、母親としてどうして妾は生長つた娘を苦しめられませうか？　マーレットは二十一です、それから妾は大概二十九や、三十ばかりの女にはどうしても見られますまい。二十九の時は頬には美しい紅い石竹の影がありました。三十になつてはそれがありません。ですから御覽なさい、どんな困難が纏繞ふかを。え、妾の干與る範圍内で、貴方の奥さんに此の死の思ひ出を慈まして下さい、汚れない母親の。どうして妾が彼女のイリユージョンを破りませうか？　妾自身のイリユージョンを保つ事は却々困難な事だと判りました。妾は昨夜一つのイリユージョンを失ひました。妾は愛情といふものを持たないのだと思ひました。また持つてゐた處で妾には不似合なものだと判りました。ウキンダーミヤさん。どの道そんなものは現代の服裝とは

一致しないものです。それがあると人を老人に見せます。（小さな鏡をテーブルかちとつて見入る）そしていざといふ場合になつて人間の境遇を臺なしにして了へます。

ウキンダーミヤ。貴女は恐しい事を言つて呉れました——本當に恐しい事を。

イレーネ夫人。（立ち乍ら）ウキンダーミヤさん、貴方は、現代の馬鹿げた小説に出て來る人間のやうに、妾に修道院の尼になれとか、病院の看護婦になれとか、そんな事を望んでゐるでせう、馬鹿〳〵しい事です。アーサー。眞の生活に於ては妾達はそんな事をいたしません——妾達の美しい容貌が失せるまでは、どうしたつて。いや——現代に於て男を慰めるものは懺悔ではなくして快樂です。懺悔なんてもう時代後れです。それから、若しも女が眞に懺悔

するなら、その女は時代後れの惡い服屋へ行かねばなりません、さもなければ誰だつて信じません。妾には斷じてまた決してそんなことは出來ません。それから妾は貴方の二つの生活から全然離れるつもりです。貴方方の生活の中に妾が來たのは間違ひだつたのです——昨夜そのことが分りました。

ウキンダーミヤ。非常な間違ひです。

イレーネ夫人。（笑ひ乍ら）全く非常な。

ウキンダーミヤ。私が、妻に早速すつかり話さなかつたのが惡いのです。

イレーネ夫人。妾は、妾の惡い行動を悔えます。貴方は、貴方の善い行動を悔えなさい——妾達の間にある相違は、ただそれ丈です。

ウキンダーミヤ。私は、貴女を信じられません。私は、妻に話します。判つた方が、彼女には善いのです、私にも善いのです。話したなら彼女は非度く悲しむでせう——恐しく耻じるでせうが、然し、彼女は判つてゐるのが當然なのです。

イレーネ夫人。貴方は、彼女に話しますか？

ウキンダーミヤ。話します。

イレーネ夫人。（彼の方へ行つて）若し貴方が話すなら、妾は妾の名を汚がしますやうに、彼女の一生涯を傷けます、彼女を破滅させ、また彼女を惡い女にさせます。若し貴方が、思ひ切つて話すなら、妾は益々墮落の淵に沈み行き、益々耻辱の穴に入るばかりです、貴方は話してはなりません——妾は禁じます。

ウキンダーミヤ。何故です？

イレーネ夫人。（暫くして）妾が、彼女を思つてゐたことを貴方に話したなら、今でも貴方は彼女を愛したかも知れません——貴方は、妾を輕蔑しなさるにも拘らず。

ウキンダーミヤ。眞實とは思はれません。母の愛は献身的で、自我的でなく、犧牲を意味するものです。貴女にはどうしてそんな事が判りませうか？

イレーネ夫人。御尤もです。どうして妾にそんな事が判りませう？　そんな事に就てはもう談らないで下さい——妾の素性を妾の娘に打ち明ける事は制めて下さい、妾が許さんのですから。それが妾の秘密です、貴方の秘密ではありません。妾が彼女に話すと決心したなら、また話さうと妾が思つたな